Yusuke ASAI × Tokyo Artpoint Project

浅井裕介×東京アートポイント計画

Yusuke ASAI × Tokyo Artpoint Project

淺井裕介 × 東京アートポイント計画

目次 | Contents

作品の残し方の検証……5
東京アートポイント計画における淺井裕介の主な活動……6

植物になった白線 代々木公園……9
世界中の何でもないところに、大事なものは何でもなく隠れている バウスシアター……51
植物になった白線 小金井……67

白線とオリンピックとユートピア［高橋瑞木］……74
みつける［小川希］……76

作品の残し方の検証

本冊子は、Tokyo Art Research Lab「プロジェクトをつくるプロジェクト」(研究開発)の一環として、まちなかに設置するアート作品の残し方を検証することを狙いに展開された事業の成果物のひとつである。当事業では、淺井裕介が東京アートポイント計画で手がけた3つのプロジェクトの記録をもとに、作品をどのように残していくかについて、維持管理と作品記録という二つの視点で検討した。

淺井裕介の『植物になった白線@代々木公園』は、平成23年度から24年度にかけて、"残る作品"として代々木公園の原宿門前広場にて制作された。野外かつ不特定多数の人々が通行する場に設置された作品は、時の経過とともに摩耗や変色、消滅が想定される。それらも作品の表情や個性と捉え、自然のままに維持していくという方針で、完成後は公益財団法人東京都公園協会にて管理されている。一方で、落書きなどが発見された際には、公園の通常管理の範囲内で速やかに対応することとなっている。作品完成後の対応についてまず議論されたのは、公園の維持管理に携わる人々が、日常的にどのようにして作品の状態を確認すればよいかということだ。作品のかたちを正確に把握していないと、なかなか現場での落書き対応が取りづらいという実態も、実際に落書きが発見された後に確認された。そこで、屋外に設置する作品の残し方について検証する試みとして、維持管理のためのツールを制作することにした。作品全体図と、パーツごとの詳細図57点をセットにした管理マップである。広範囲にわたる作品の端から端までをマップに収めるために、高所作業車での撮影を行った。

維持管理のために真上から撮影された記録写真は、期せずして、公園の広場に立った際に見えてくる風景とは異なる作品の表情を捉えることとなった。本冊子ではそれらの写真を、入口から中心部に向かって螺旋を描きながら並べ、『植物になった白線@代々木公園』の世界をひとつひとつ辿るように紹介している。

今回は、その代々木公園の作品記録を中心に、「TERATOTERA」における吉祥寺バウスシアターのプロジェクト、「小金井アートフル・アクション！」の一環として2つの小学校で実施した『植物になった白線@小金井』など、淺井が平成23年度から26年度にかけて東京アートポイント計画事業で行ったプロジェクトの記録を再編集し、活動の変遷を追っている。既存の記録写真を素材に編集を試みているため、写真の選定には困難を伴った。写真にキャプションやクレジットは付記されているか、今回のための使用許可は取得可能かなどによって、使える写真の点数はかなり絞られてくる。アートプロジェクトにおいて、どのような記録写真を撮影するか、また、必要な時に使える写真として維持管理するには、撮影時からどのような設計をする必要があるのかという難題について、あらためて考える機会となったといえる。

東京アートポイント計画における淺井裕介の主な活動

公園プロジェクト
『植物になった白線@代々木公園』

実施期間:
「植物になった白線@代々木公園」
平成23年9月19日ワークショップ、9月20日–10月8日公開制作、10月11日より一般公開
「植物になった白線@代々木公園——手入れの日」
平成24年11月30日午前ワークショップ、11月30日午後、12月1日公開制作
会場:代々木公園原宿門前広場ほか
主催:東京都、東京文化発信プロジェクト室(公益財団法人東京都歴史文化財団)、公益財団法人東京都公園協会、特定非営利活動法人S.A.I.

平成22年に新しくなった代々木公園原宿門前広場にて、「植物になった白線」の作品制作ワークショップと公開制作を実施。公募で集まった制作ボランティア「白線隊」を中心に、のべ約80人が制作に参加。ワークショップでは、普段は道路線やサインに使われる白線シートを茎や葉っぱ、鳥や虫、小人や生き物、三画など、さまざまな形に切り出し作品素材を準備した。原宿門前広場では、切り出した白線素材を、ガスバーナーで地面に焼き付ける。偶然通りがかった公園来場者も、白線の切り出しや焼き付けに参加しながら、公園に新たな風景を生み出した。平成24年度に実施した「植物になった白線——手入れの日」では、前年度に制作された作品のメンテナンスをしながら、植物や動物を少しずつ増やし、公園の憩いの空間をより表情豊かに変化させた。

＊公園プロジェクト
公園や公開空地など、人が集う公共の場でアートプロジェクトを展開することで、その場に新たな魅力を創出することを目的に展開する。

TERATOTERA
途中下車の旅17@吉祥寺
THE LAST BAUS × TERATOTERA
『世界中の何でもないところに、大事なものは何でもなく隠れている』

制作期間:平成26年5月9日–17日
作品公開期間:平成26年6月4日–6日
会場:吉祥寺バウスシアター 外壁および館内の壁
主催:東京都、東京文化発信プロジェクト室(公益財団法人東京都歴史文化財団)、一般社団法人Ongoing
協力:吉祥寺バウスシアター

30年の歴史に幕を閉じる吉祥寺バウスシアターの最後に花をそえるべく、淺井裕介がその外壁や内壁に9日間絵を描いた。吉祥寺の重要な文化拠点のひとつであり、数々の名作を上映し続けた老舗映画館の時空にインスピレーションを受けながら作品は制作された。バウスシアターの来場者や職員も作品の一部に映画館へのメッセージを書き添えることで作品に参加した。

*TERATOTERA[テラトテラ]
JR中央線高円寺駅から国分寺駅区間をメインとした東京・杉並及び武蔵野、多摩地域に点在するアートスポットをつなぎながら、現在進行形のアートを発信するさまざまなプログラムを展開する。

小金井アートフル・アクション！S&G/小金井アートフル・アクション！
『植物になった白線@小金井』

実施期間:平成23年12月14日–12月28日、平成24年11月19日–11月25日
会場:小金井市立本町小学校(平成23年度)、小金井市立南小学校(平成24年度)他
主催:東京都、小金井市、東京文化発信プロジェクト室(公益財団法人東京都歴史文化財団)、特定非営利活動法人アートフル・アクション

小金井アートフル・アクション！のアーティスト招聘事業、学校連携事業の一環として実施した。淺井裕介の"残る作品"の特徴を活かして、小金井市立本町小学校と南小学校6年生の卒業制作という位置づけで、「植物になった白線」に取り組んだ。6年生の児童と、保護者、地域の人々や制作ボランティアの協働により事業は展開された。

*小金井アートフル・アクション！S&G(平成23年度)/小金井アートフル・アクション！(平成24年度)
小金井市をフィールドに、市民がアートと出合うことで、心豊かな生き方を追求するきっかけをつくることを目的とし、芸術文化によるまちづくりの検討や市民が事業に関わる場づくりを実施する。

Yusuke ASAI × Tokyo Artpoint Project

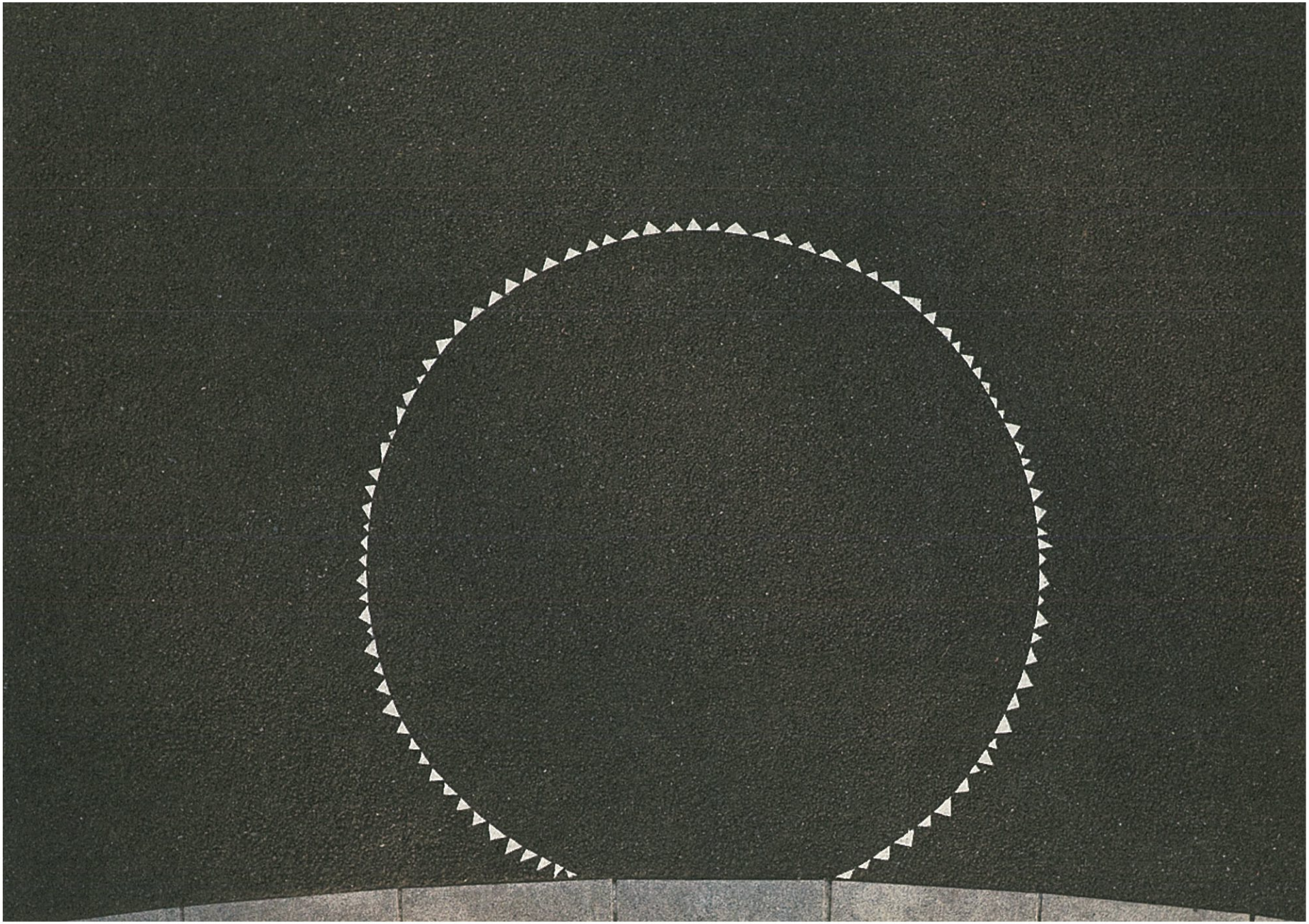
植物になった白線

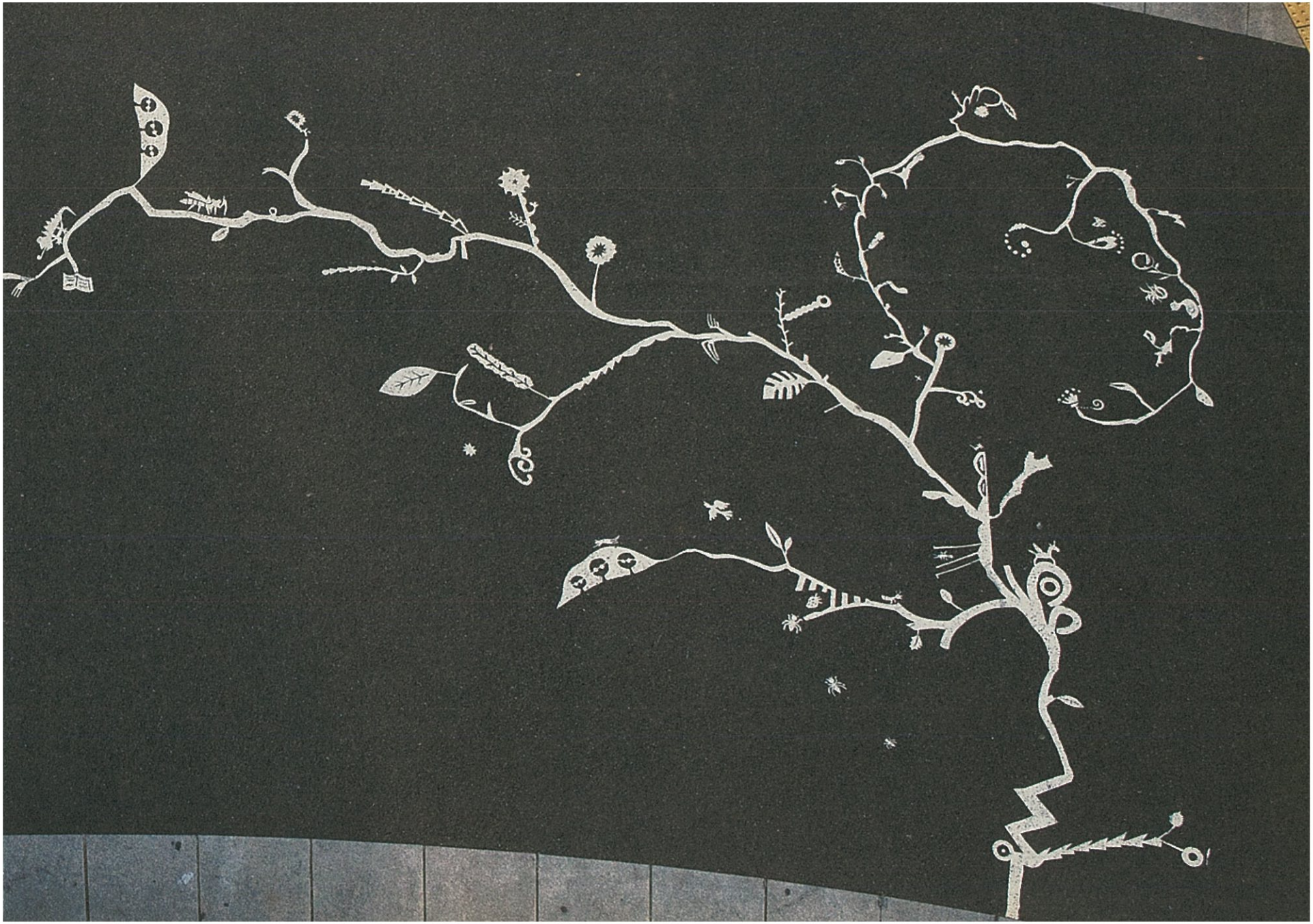
代々木公園

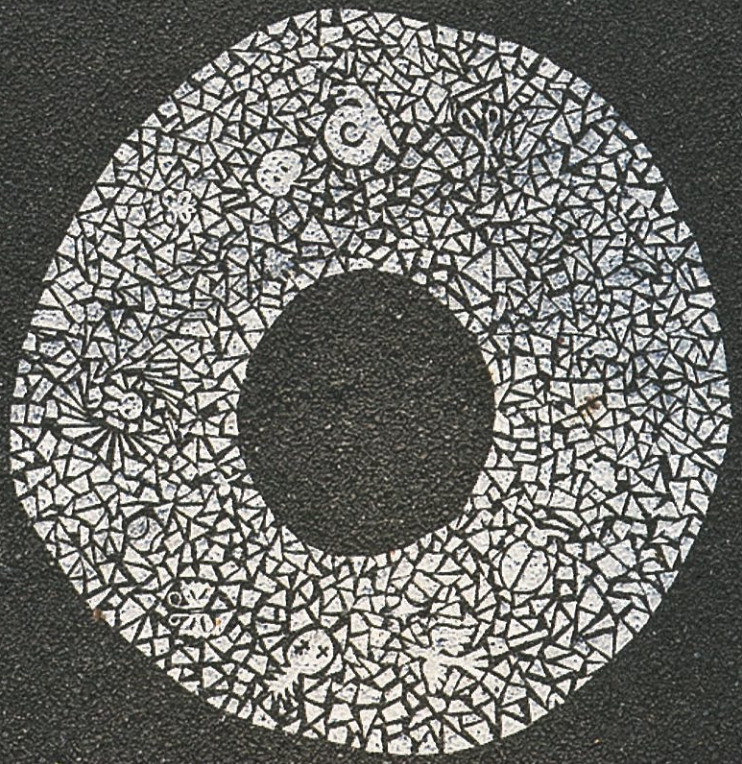
2011, 2012

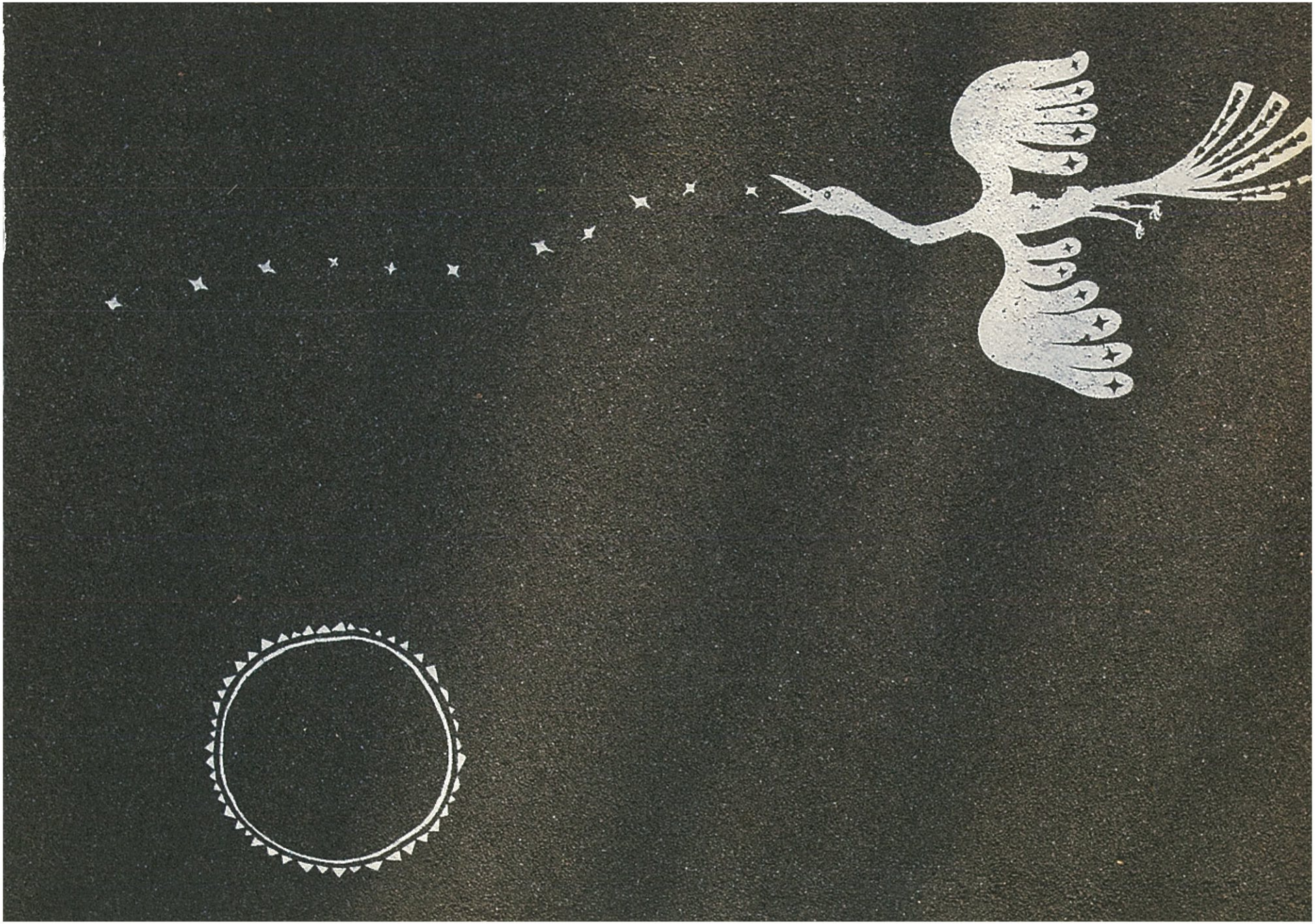
理髪にきょうこの日機の代ゴキ込

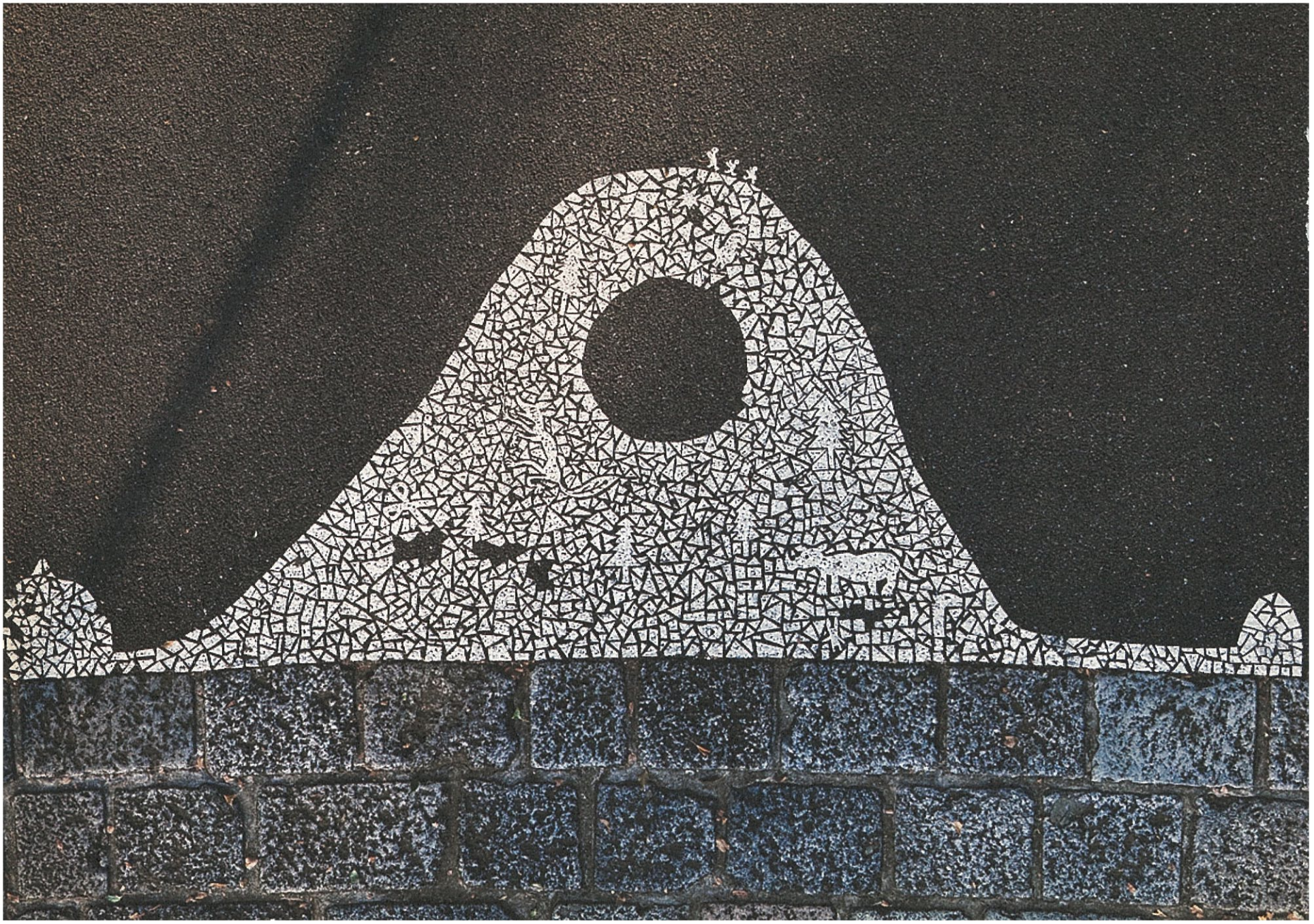
動物になった白線@代々木公園

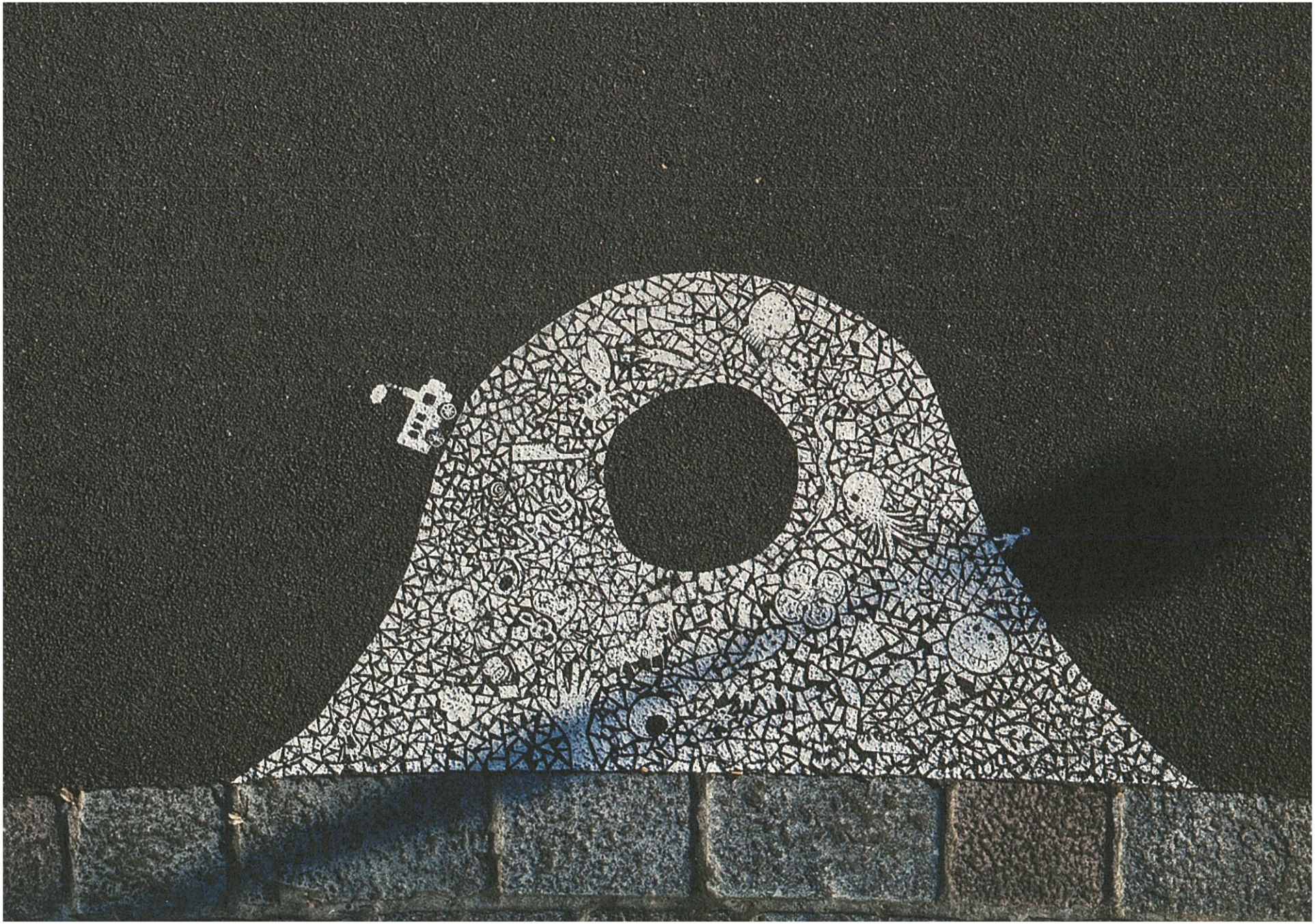


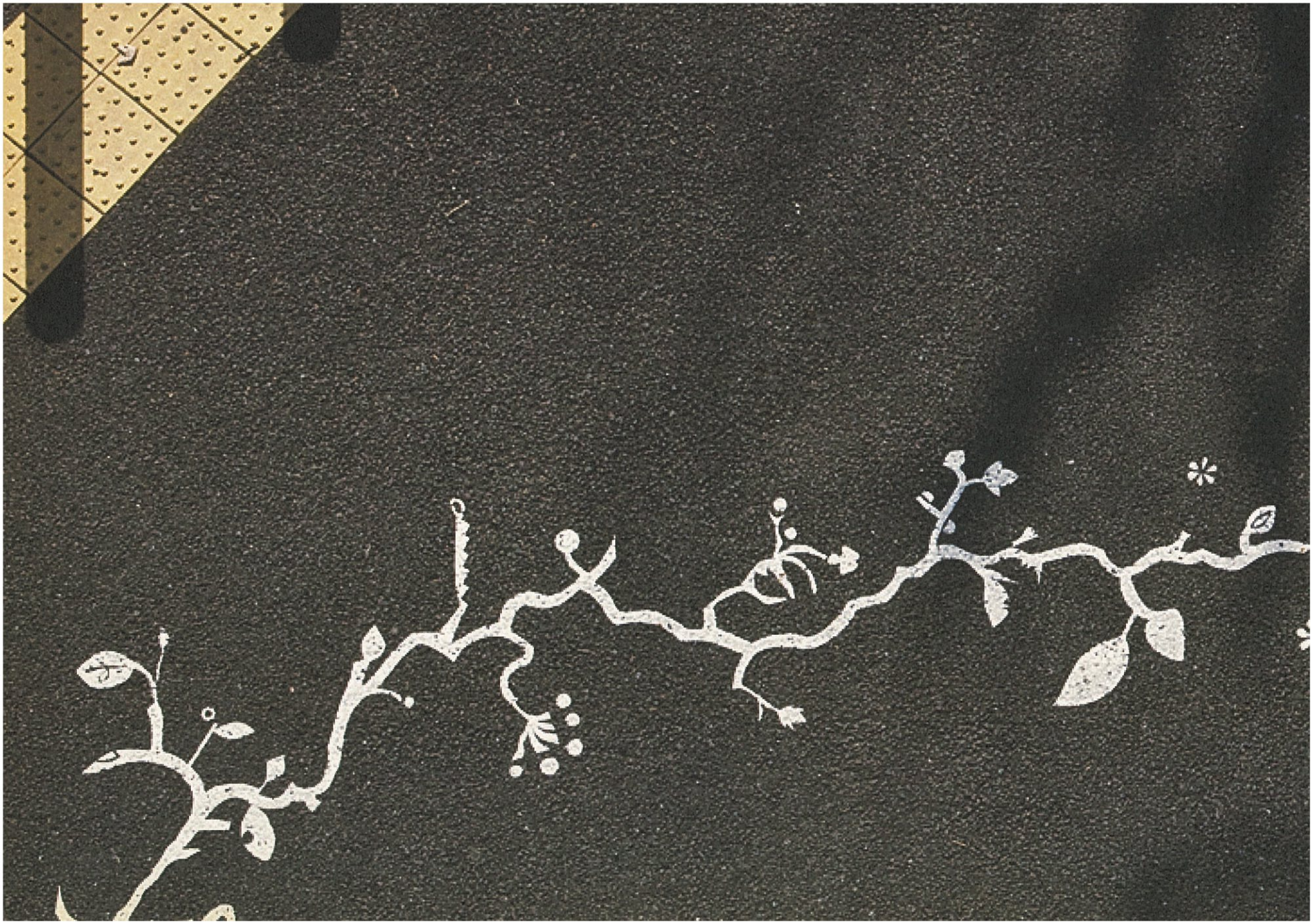


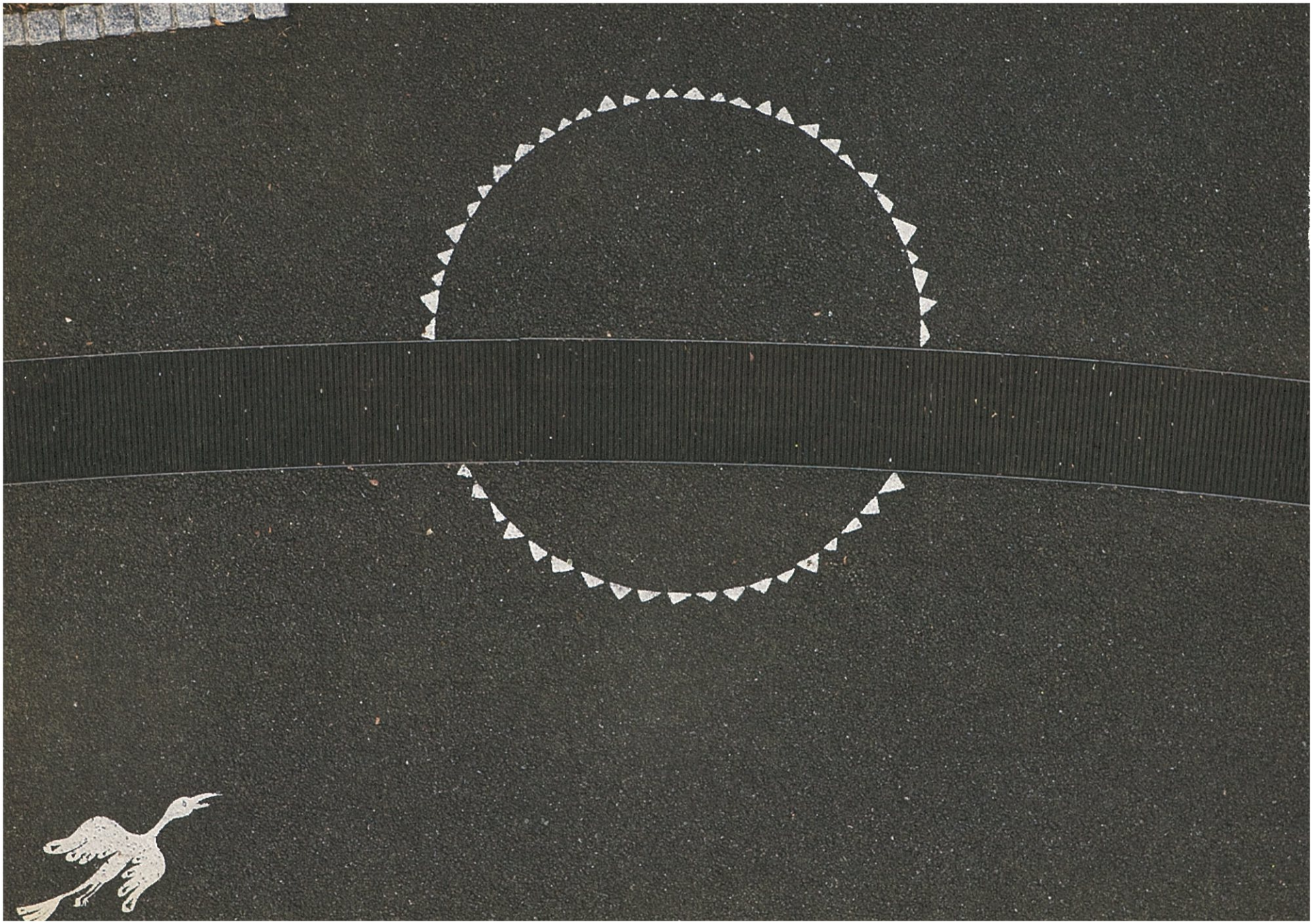


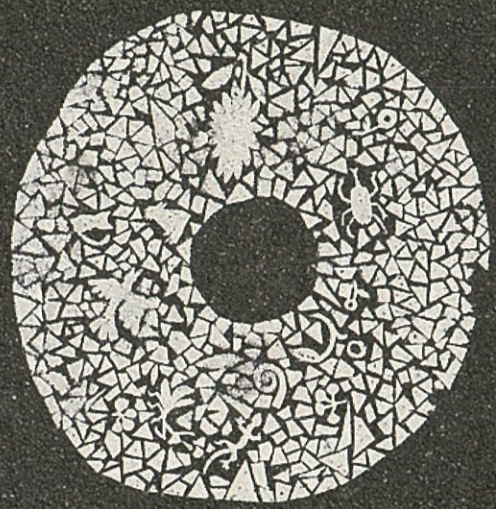


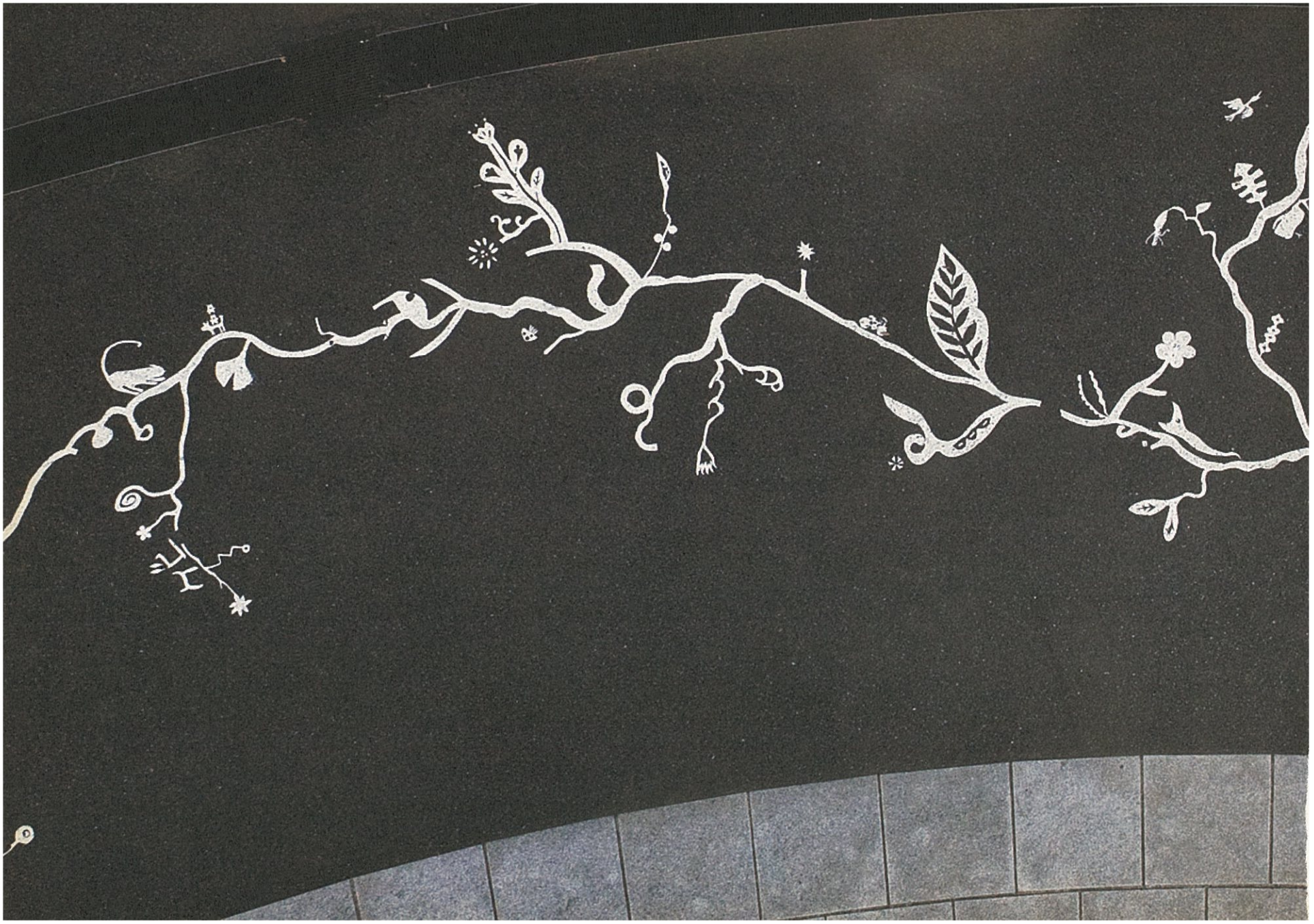


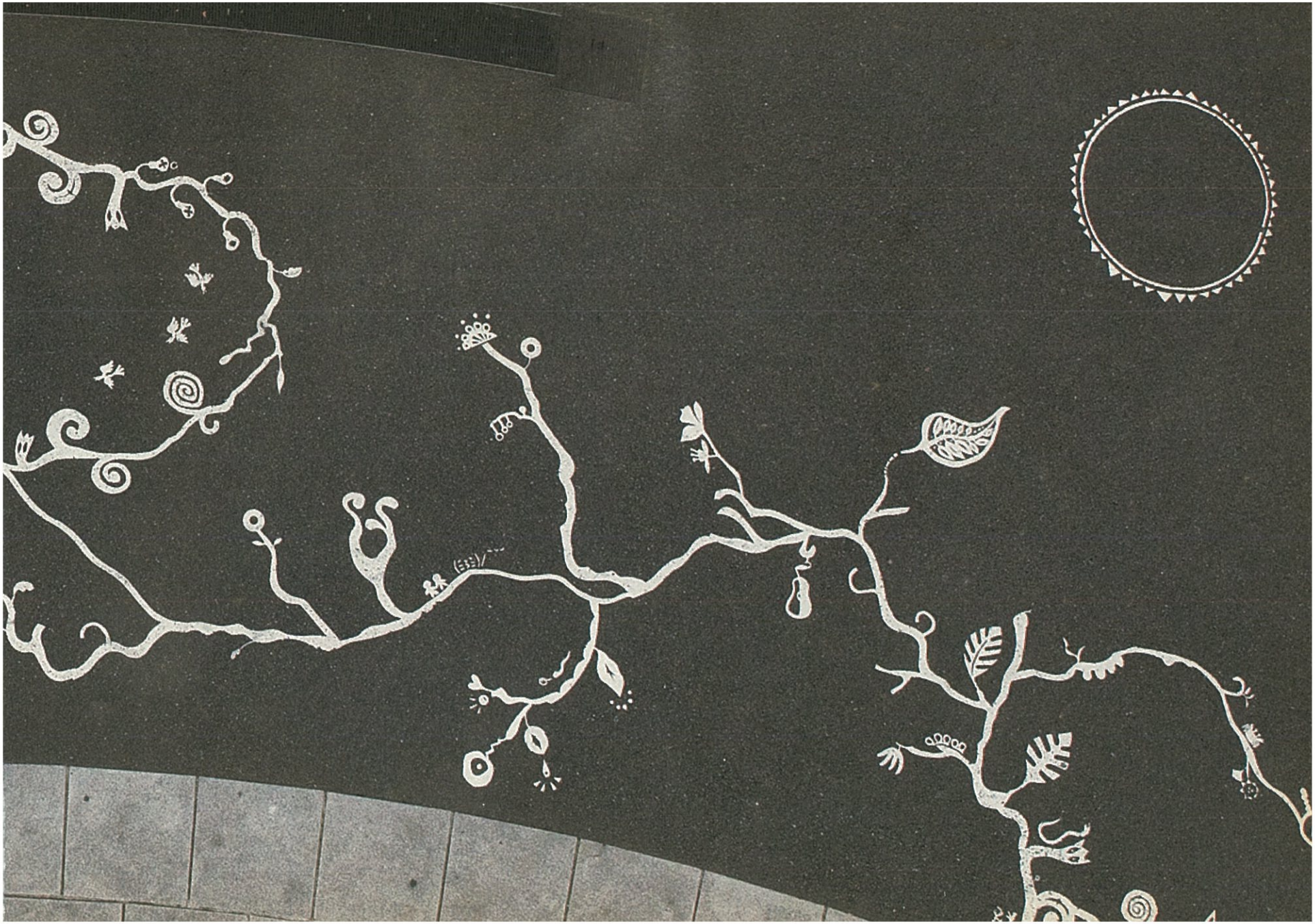


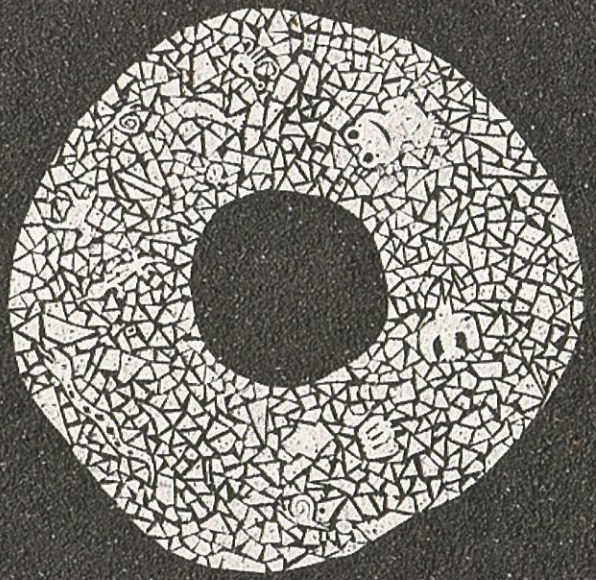


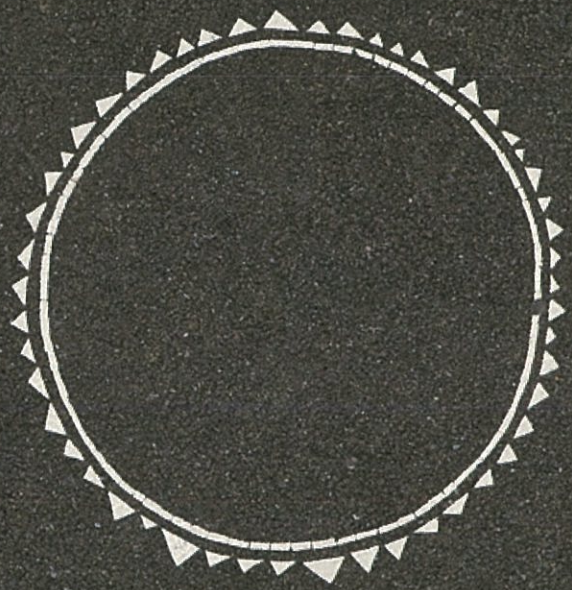


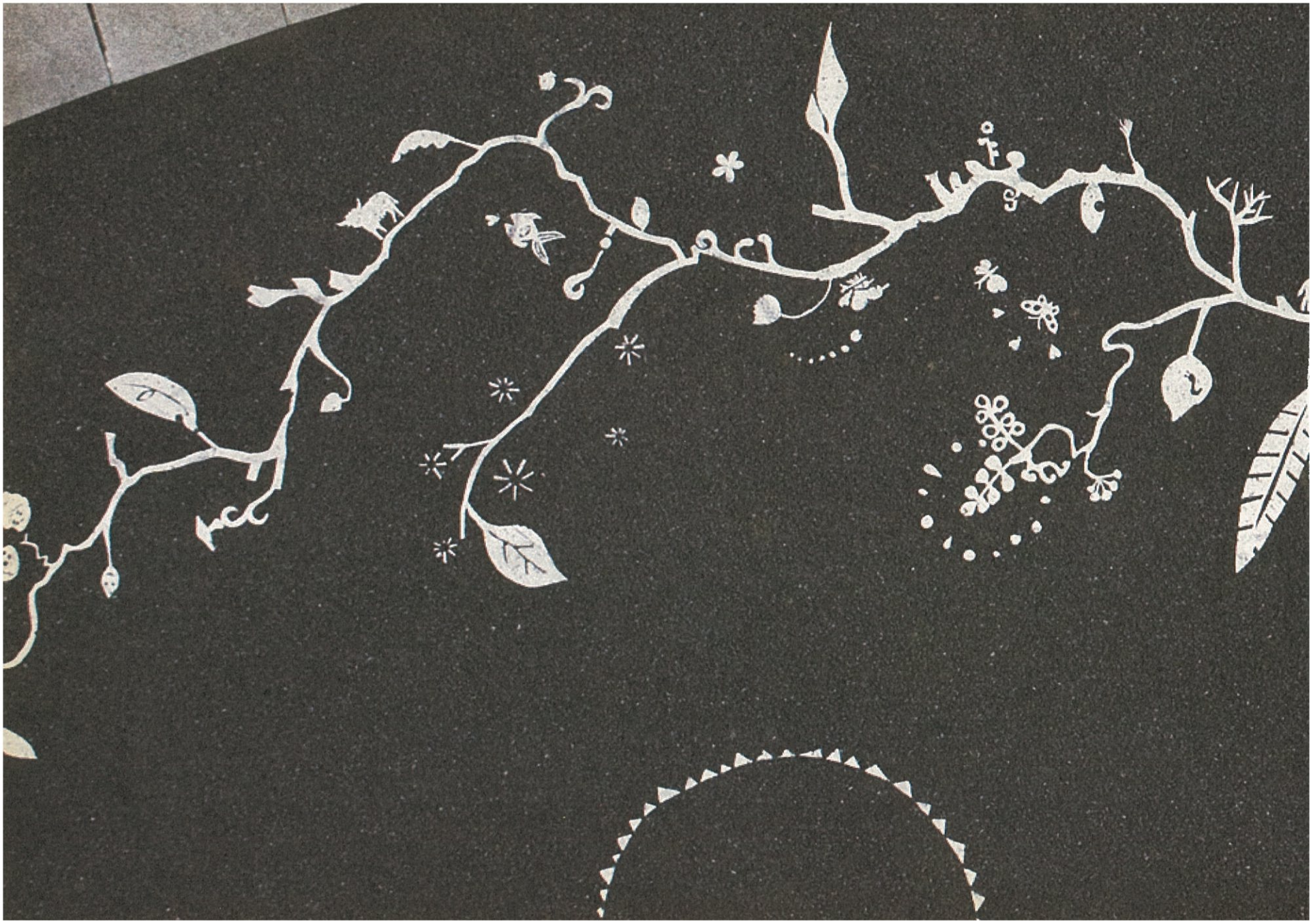


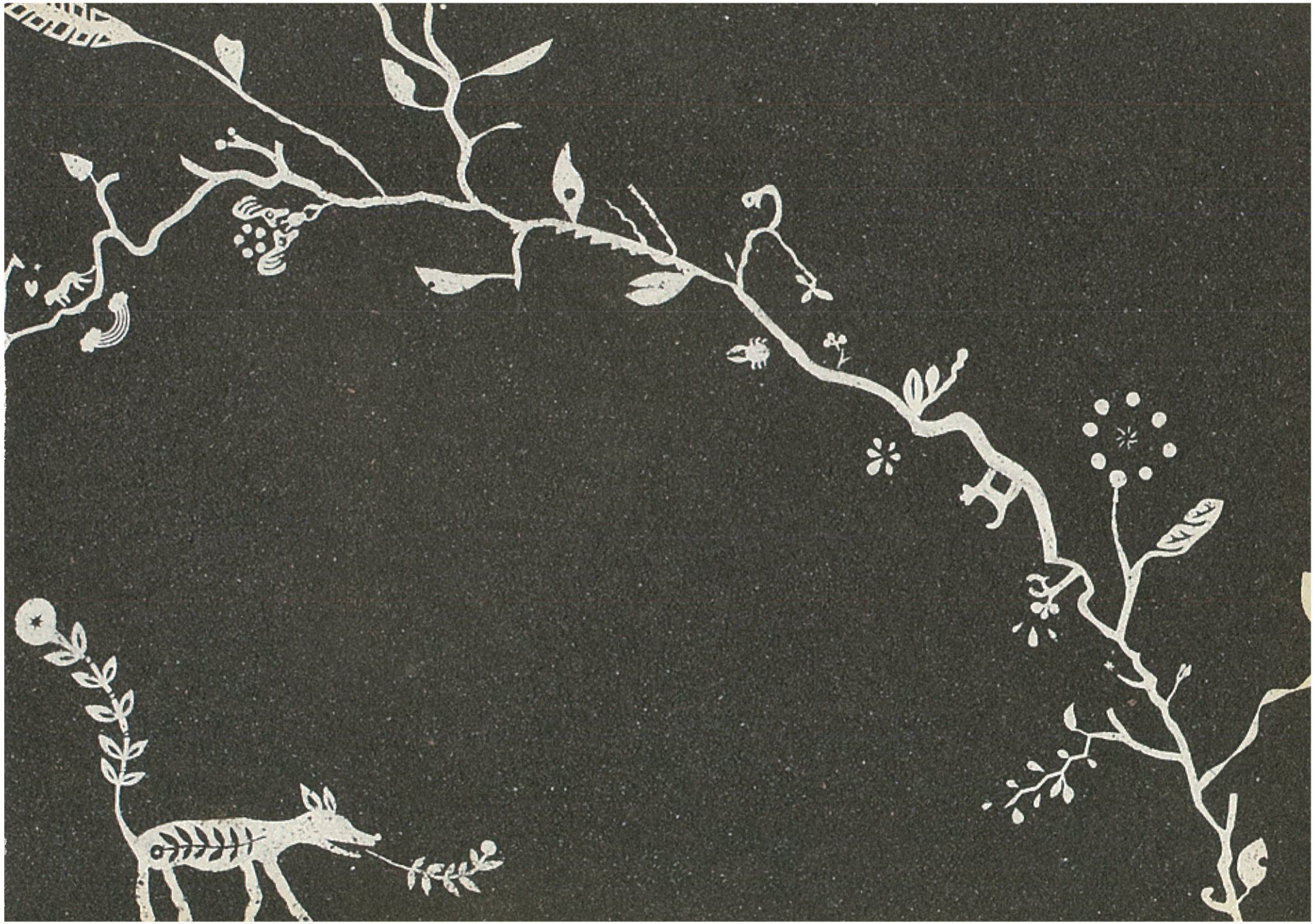


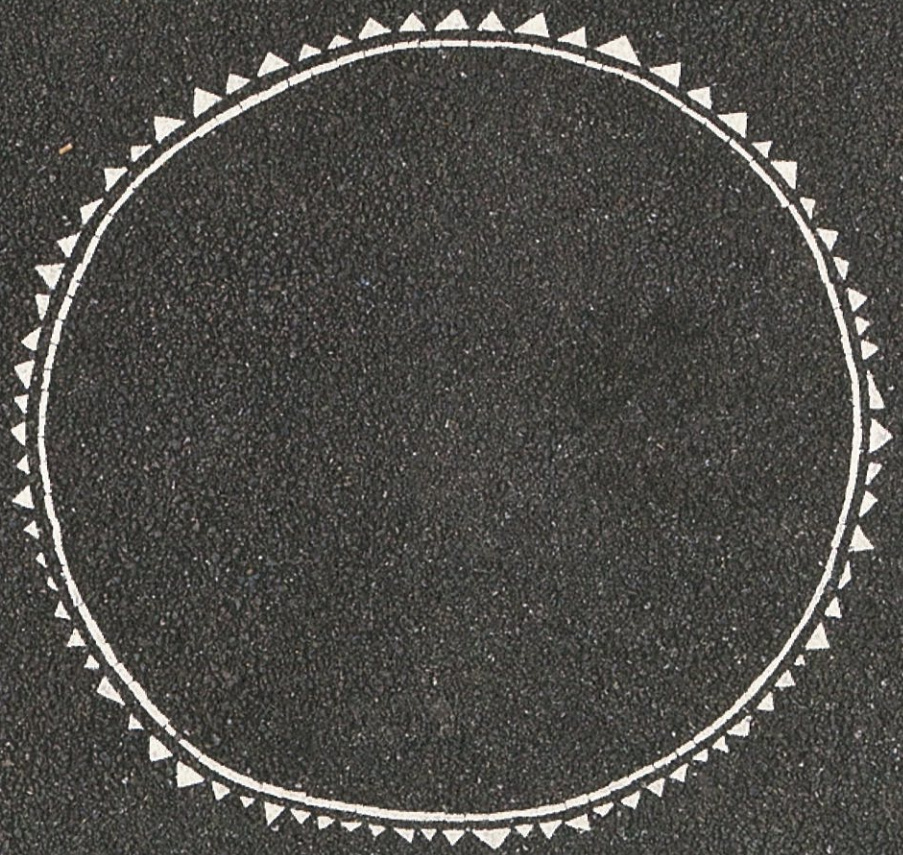


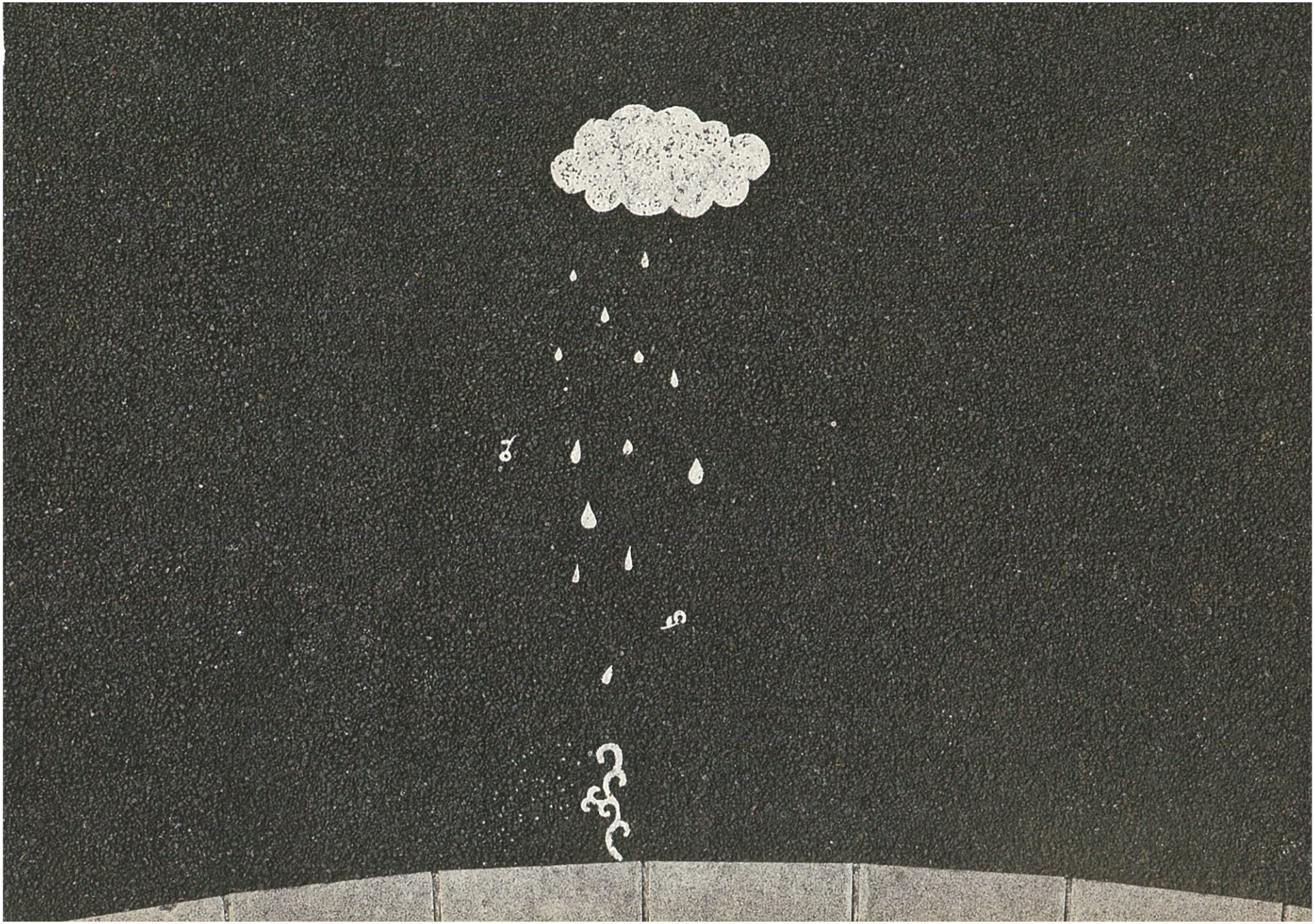


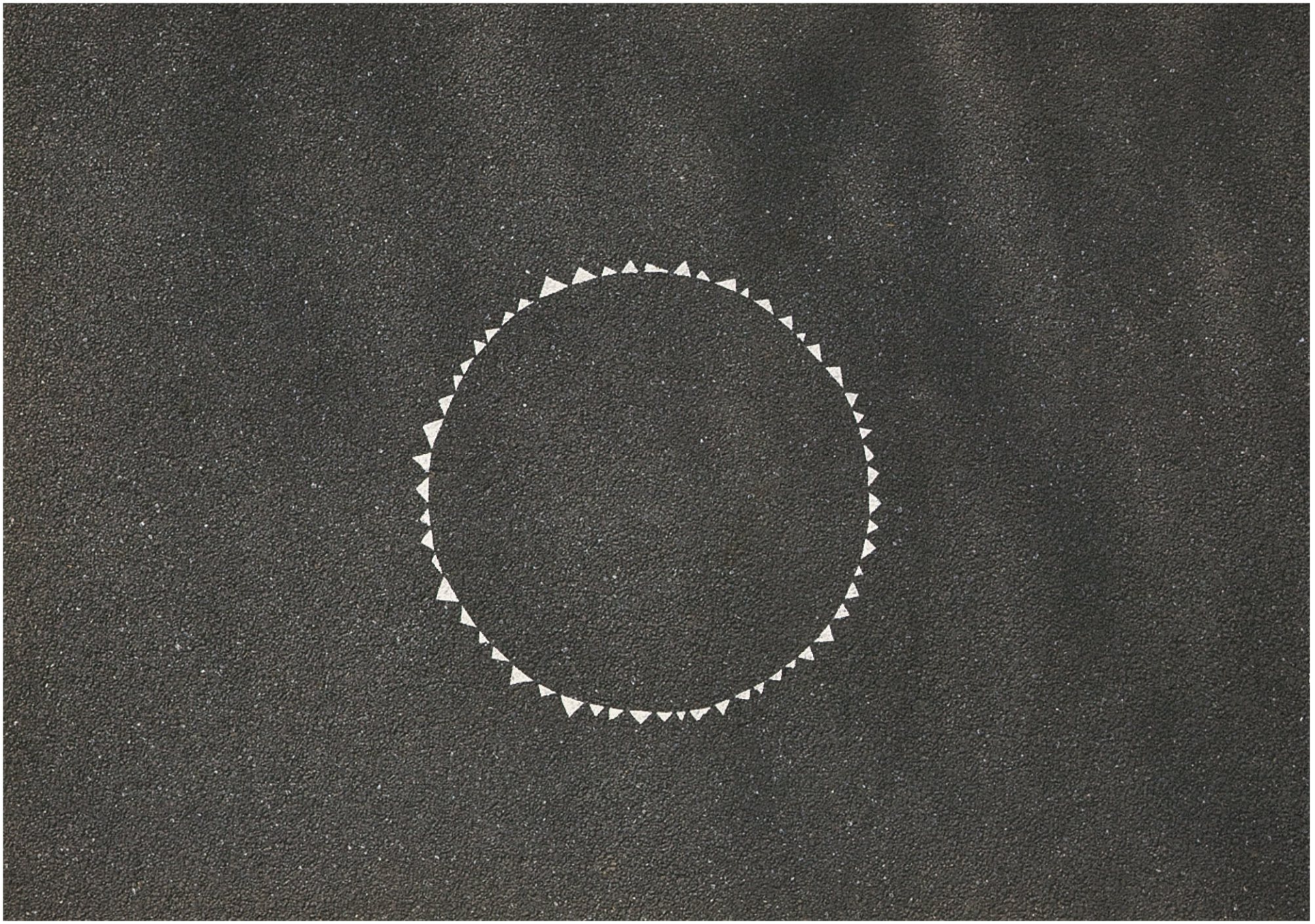


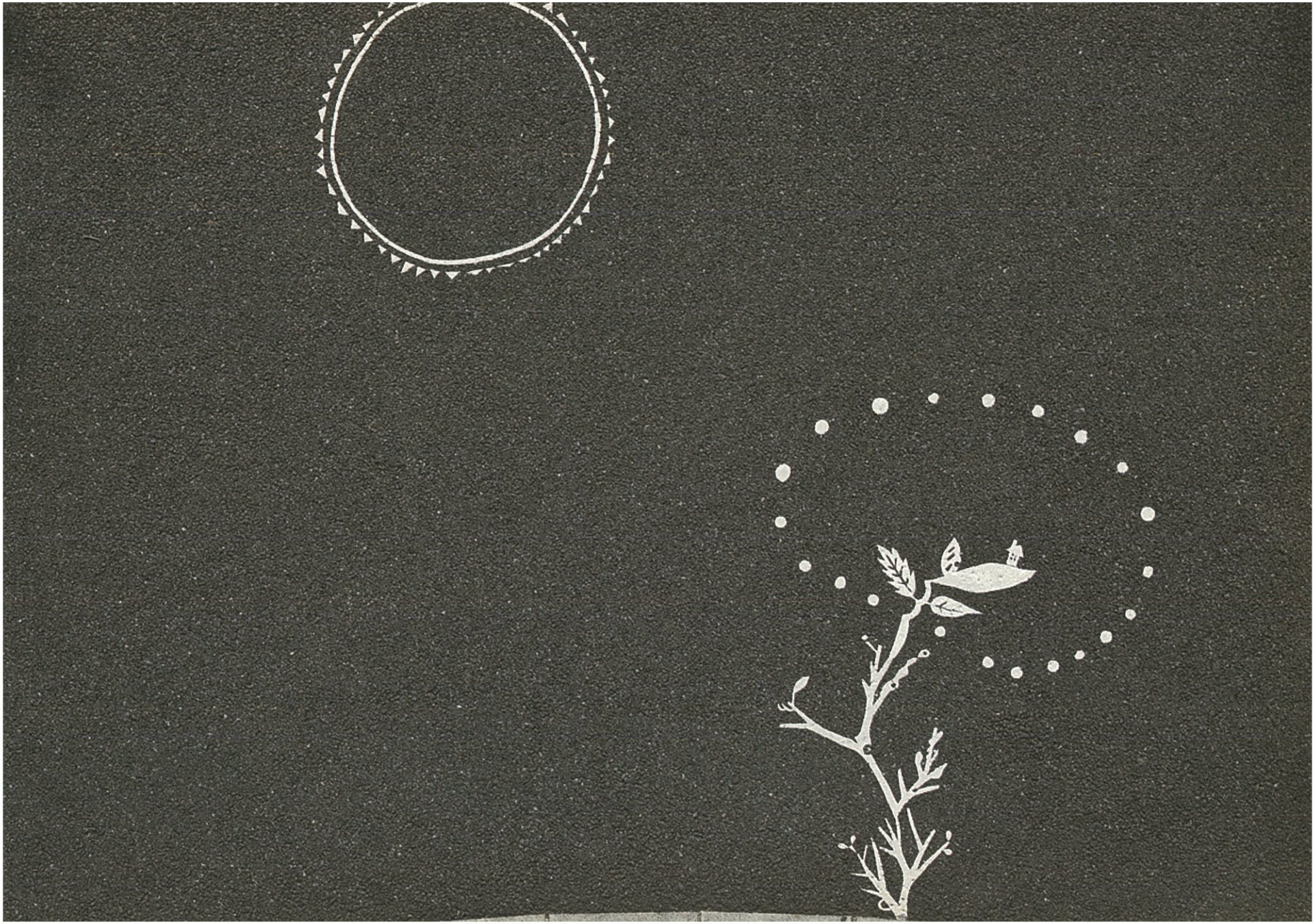


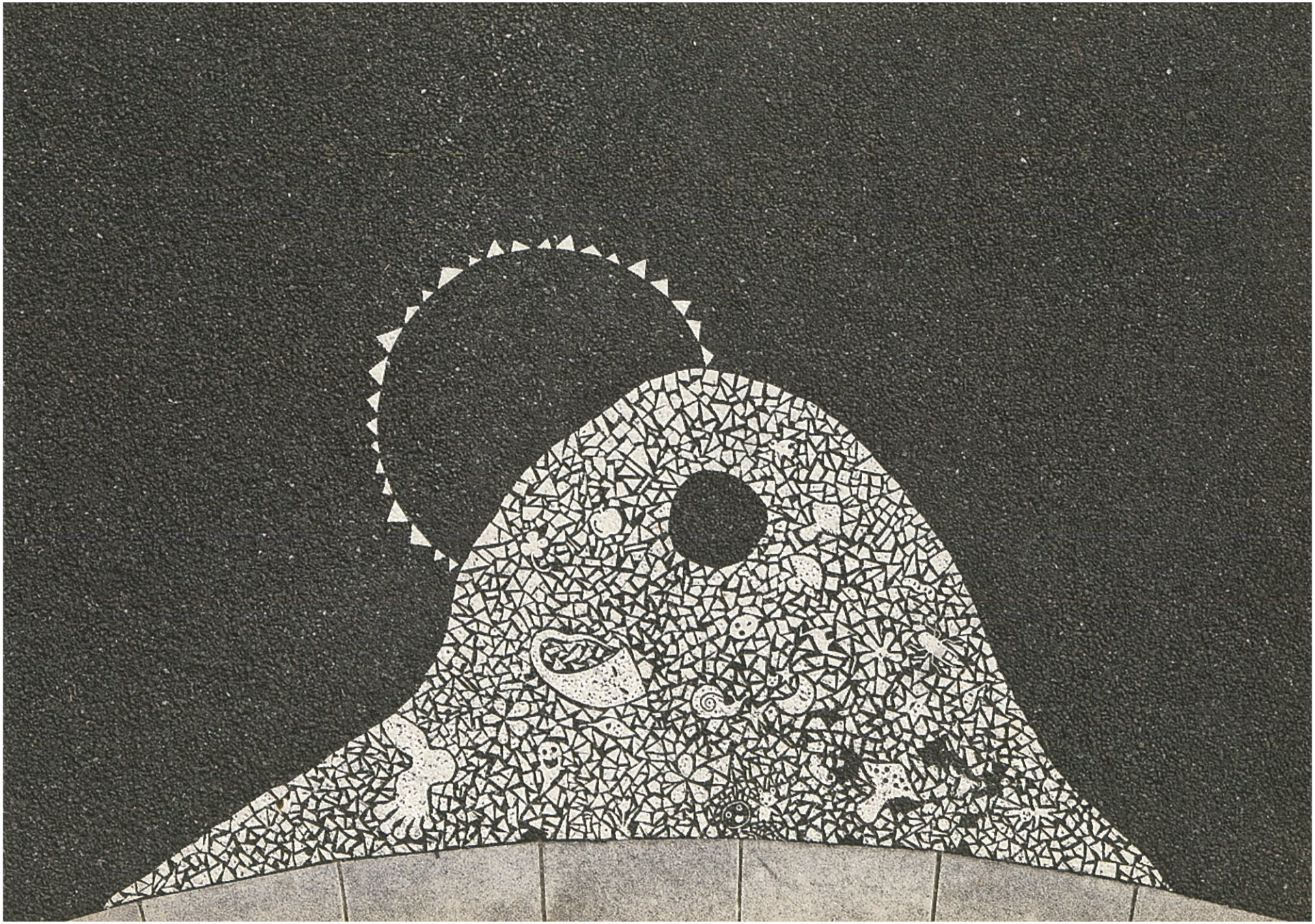


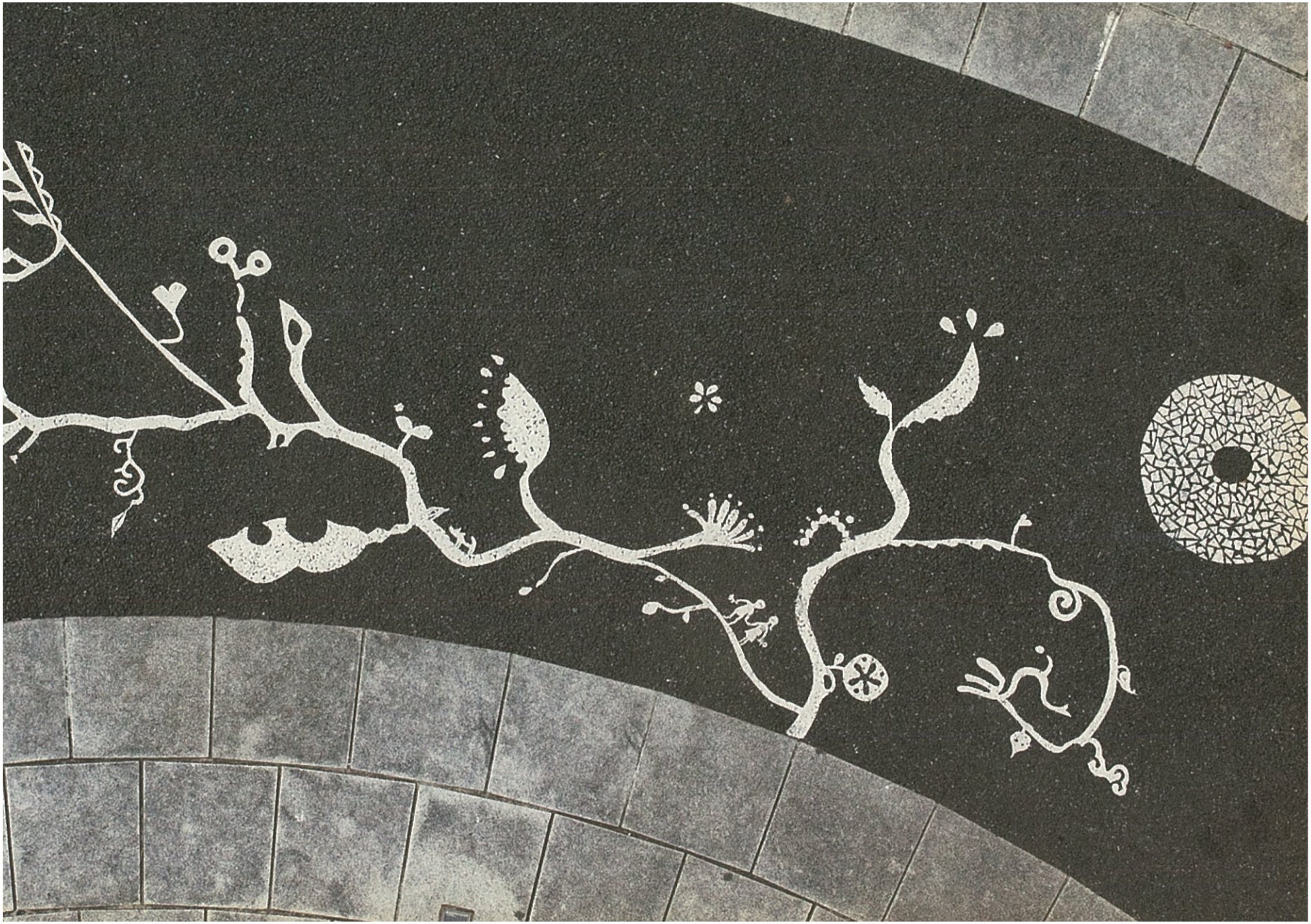


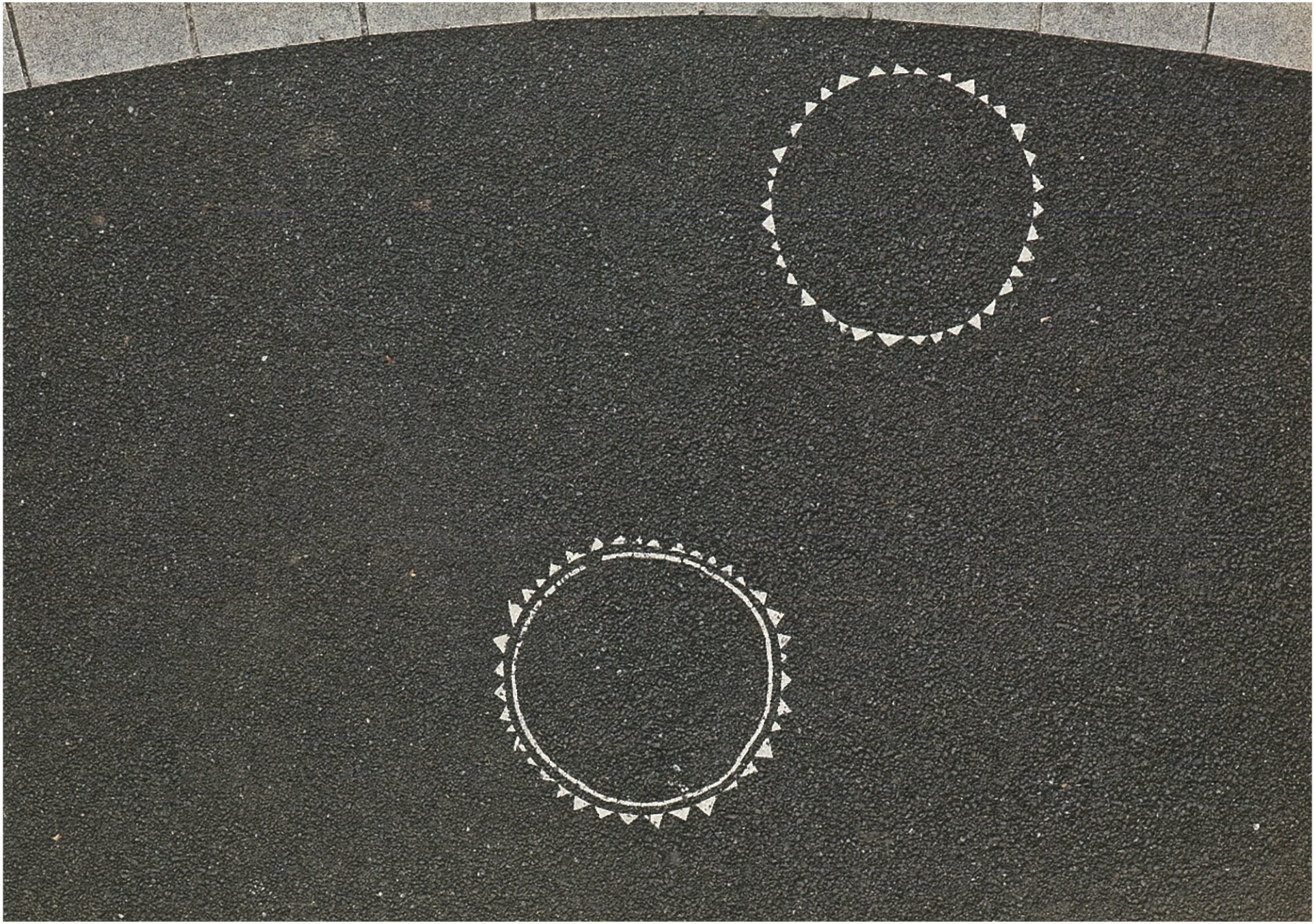


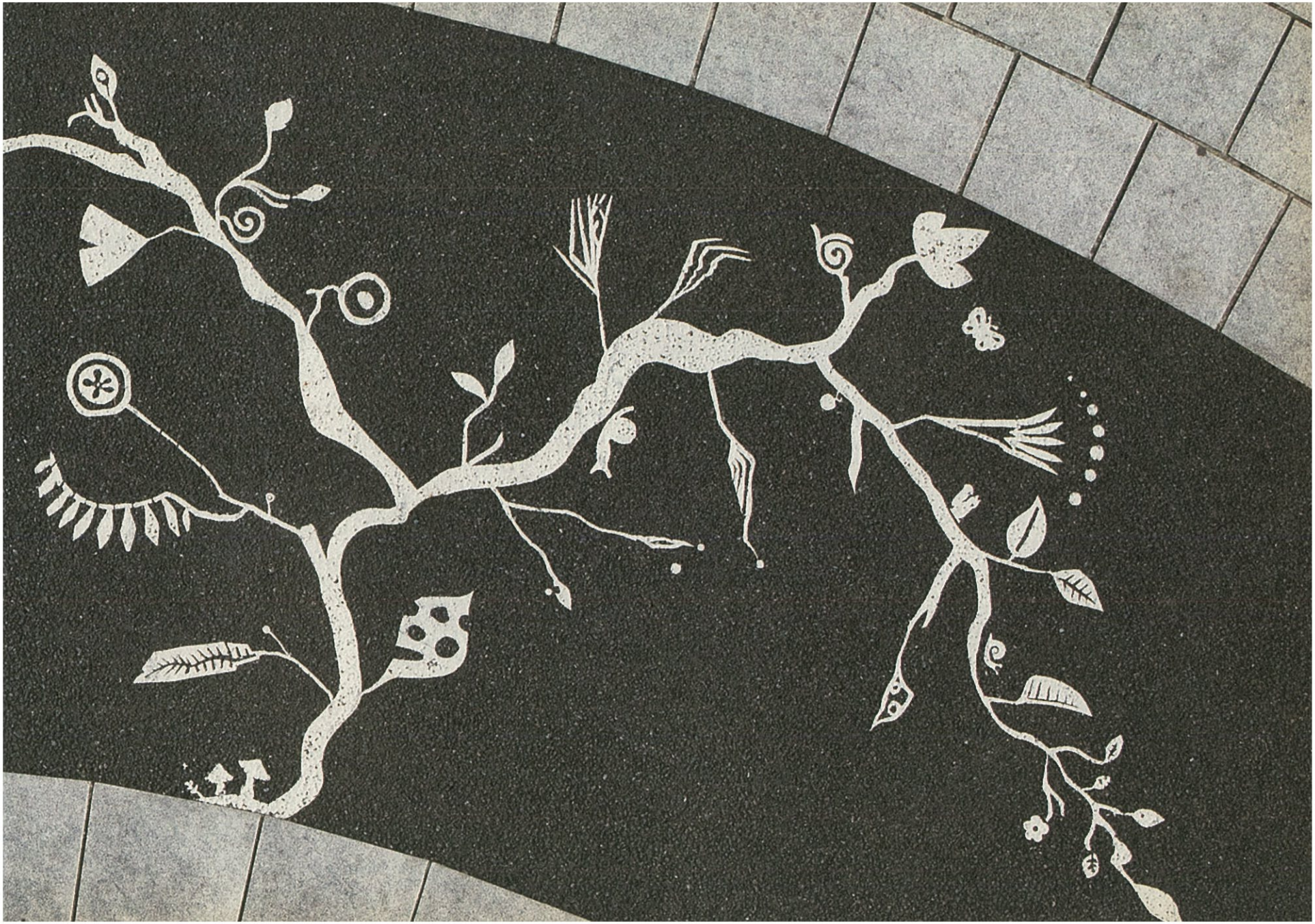


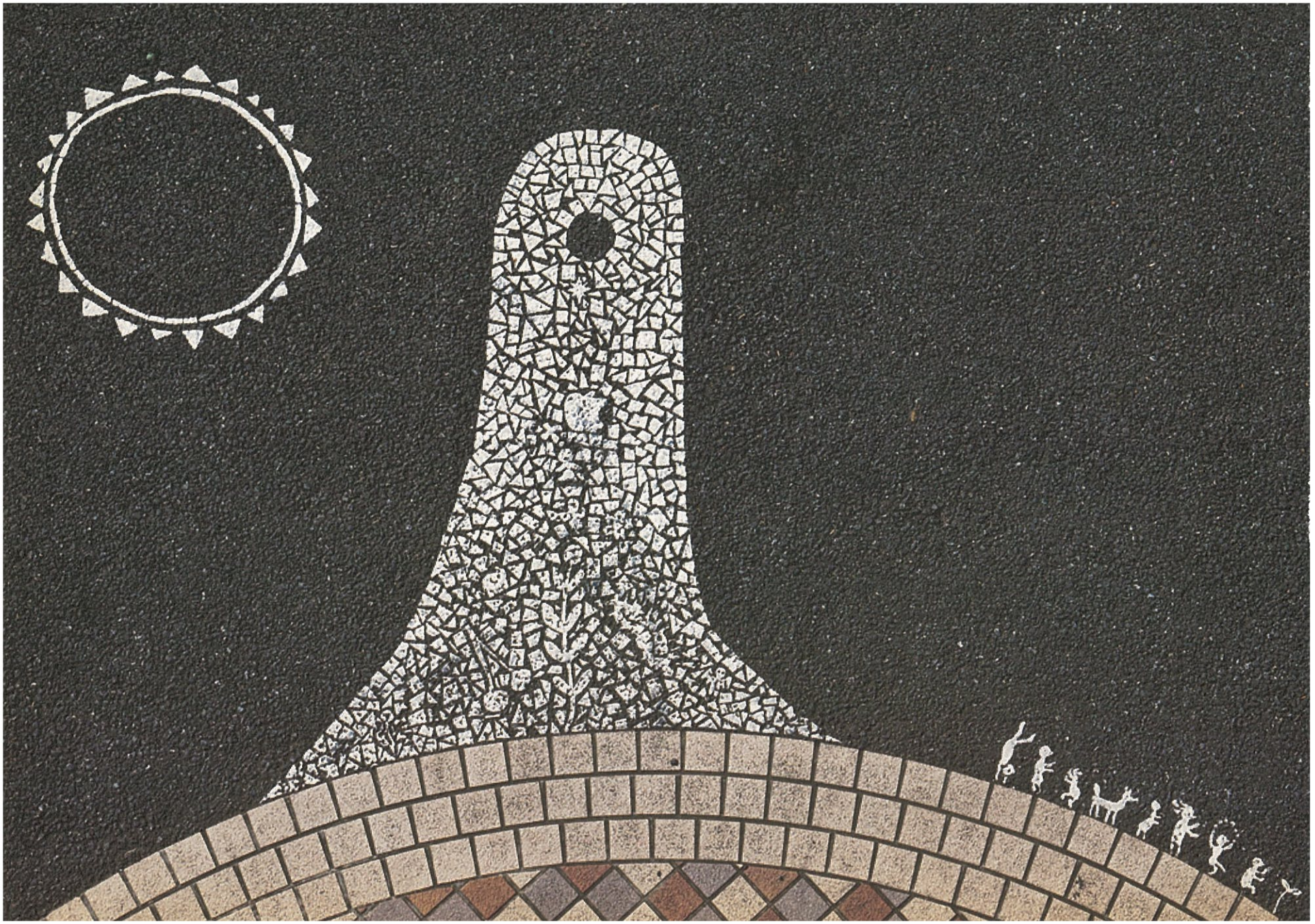


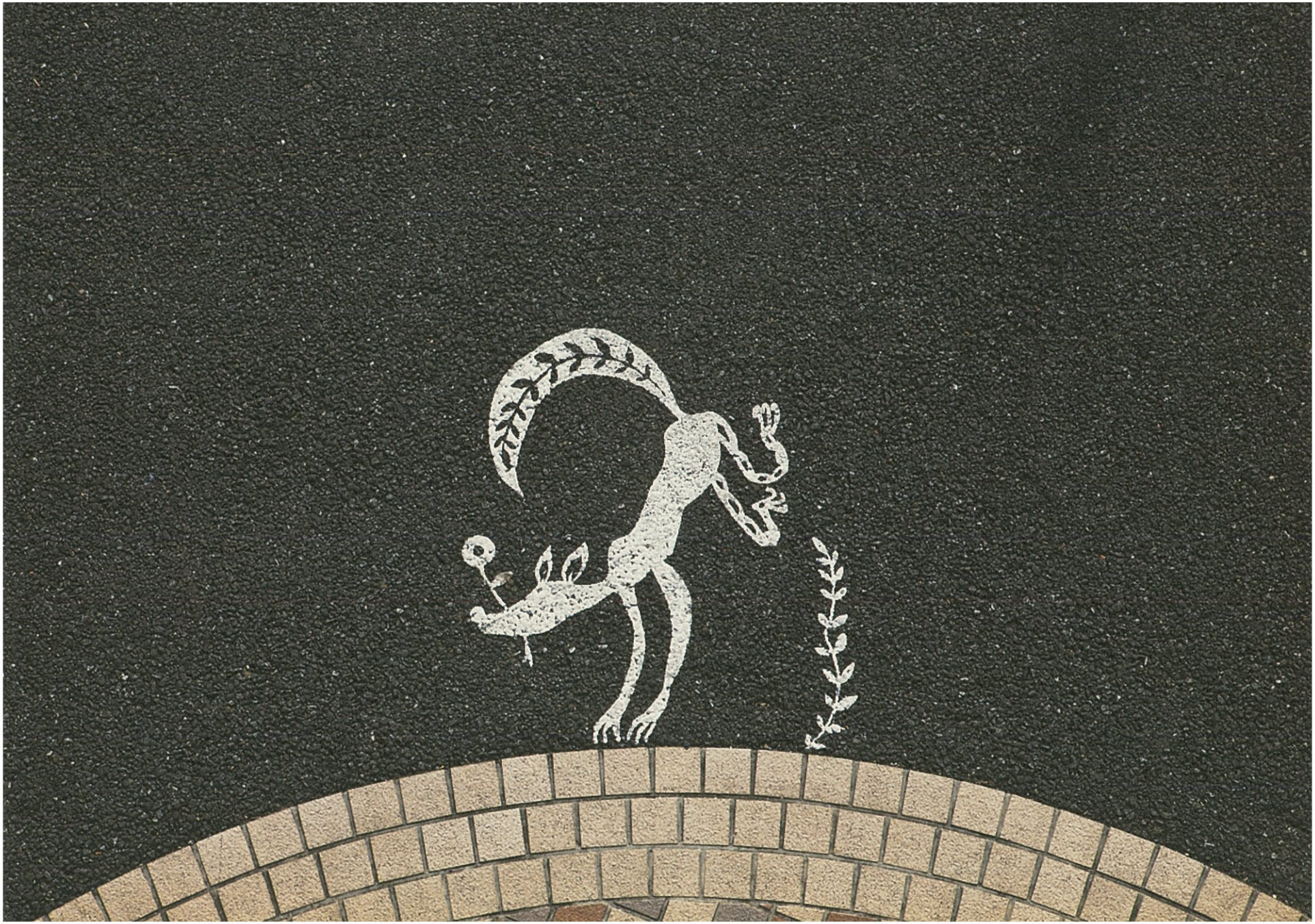












Yusuke ASAI × Tokyo Artpoint Project

世界中の何でもないところに、
大事なものは何でもなく隠れている

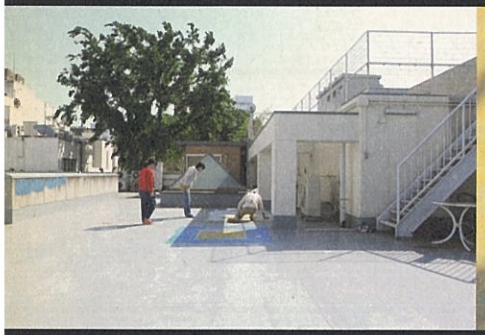
バウスシアター

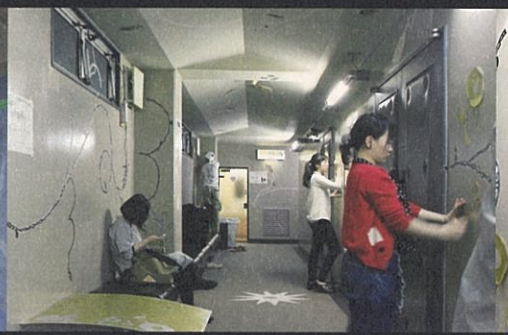
2014

CINEMA
BAUS 2

BAUS 0
BAUS 3
BAUS 2

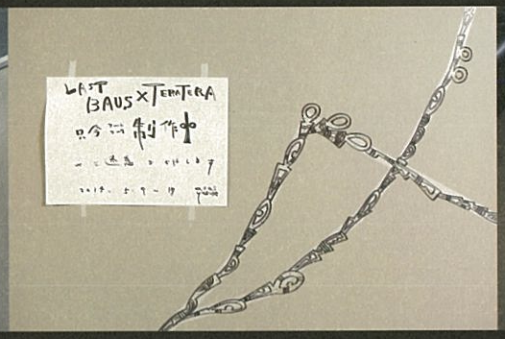
次回ロードショー
THE LAST BAUS





次回ロードショー
THE LAST BAUS

BAUS TOWN

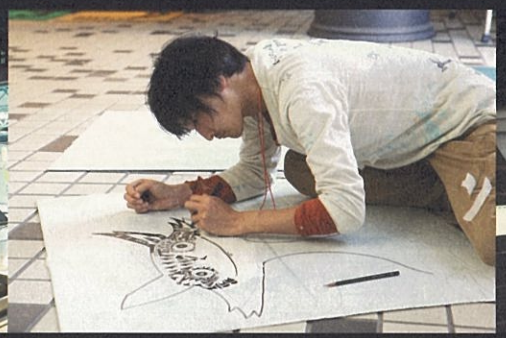

BAUS×TENTERA

BAUS TOWN

BAUS 1
BAUS 2
BAUS 3
BAUS
ミュアター
1 2 3

BAUS
BELLRING少女ハートの
6次元ギャラクシー
BAUS
OPEN 6:45
各回入替制
THE LAST BAUS

BAUS
BAUS
BAUS



CO
FOR
FUTURE

BAUS
シアター

CINEMA
BAUS
2

CINEMA
BAUS
2

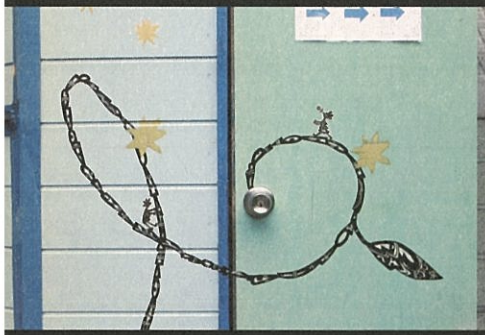
BAUS
1

BAUSハウス
は伝説でなく長く
語り継がれる神話の
元になりそう予感も
感じます!
40年の長きに渡り
皆様にご愛顧頂き
まして本当にありがとう
ございました。
これからもBAUSハウスは
ずっと!
ずっと!
ずっと!

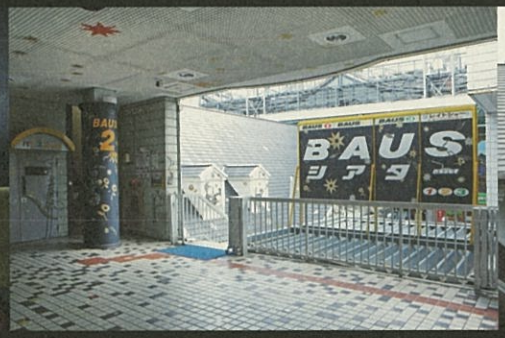
AKIKA

MOS
モーニングやって

BAUS TOWN



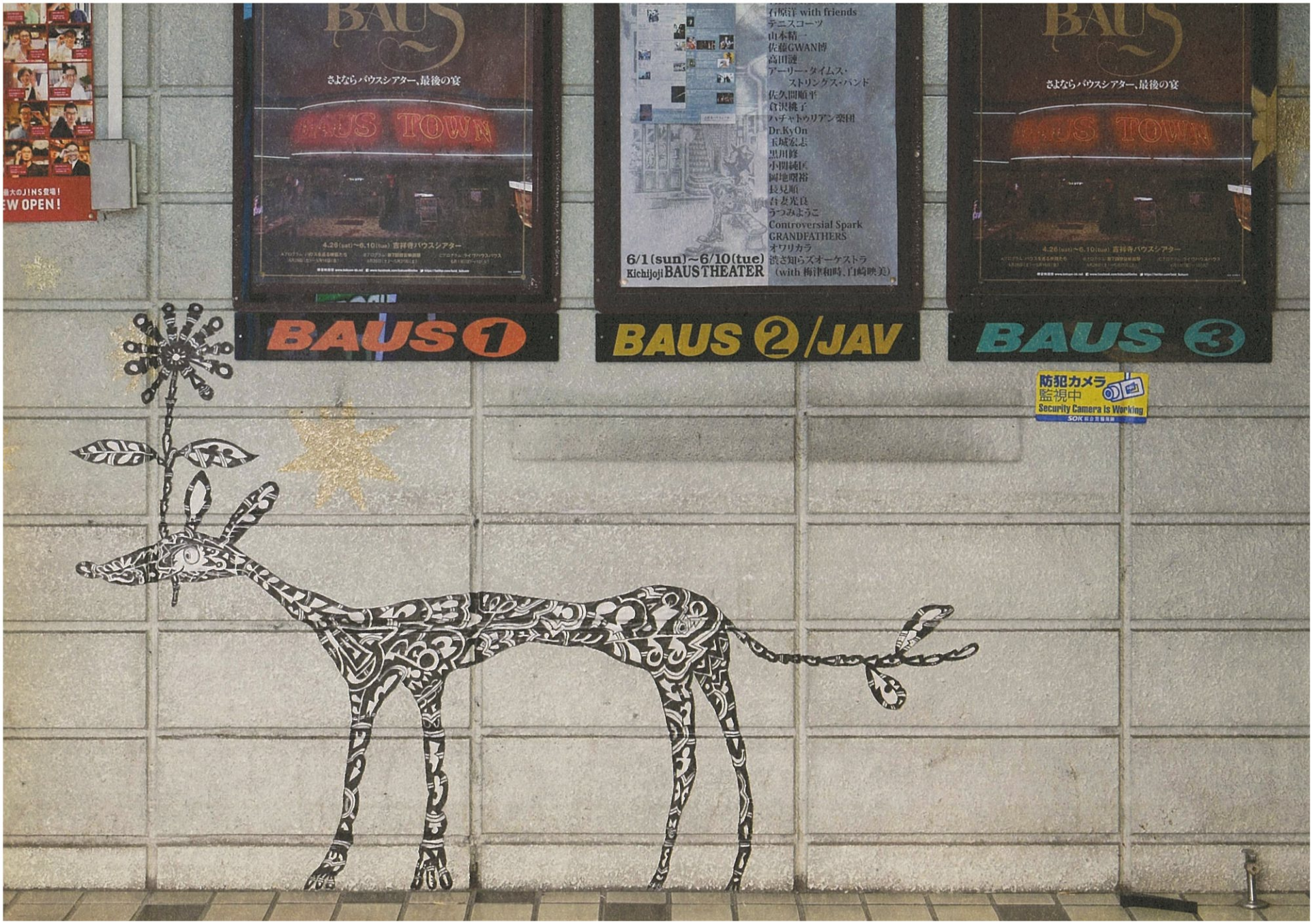
Bye
Bye...
BAUS 1


BAUS
シアター

吉祥寺 バウスシアター
BAUS
BAUS 1&3

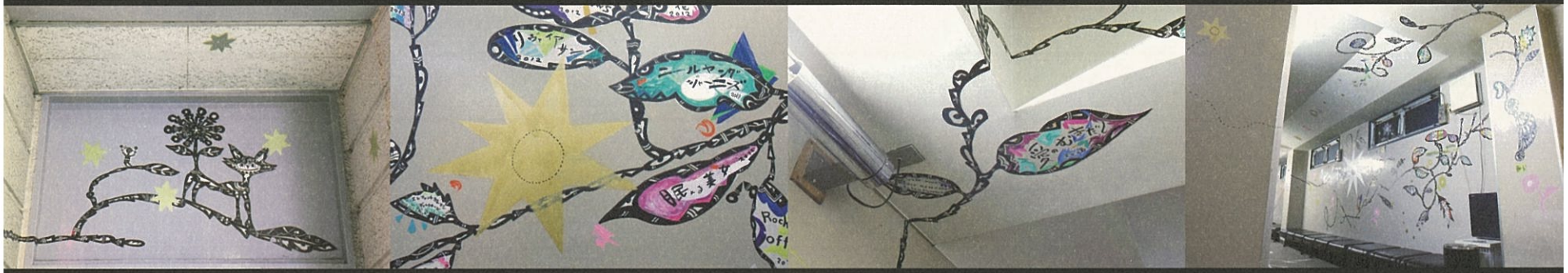
j/cinema
入口

CINEMA
チケット
BAUS 1
BAUS 3
BAUS 2


BAUS
さようならバウスシアター、最後の宴
BAUS TOWN
4.26(sat)~6.10(tue) 吉祥寺バウスシアター
BAUS 1
石原洋 with friends
デニスコーツ
山本精一
佐藤GWAN博
高田漣
アーリー・タイムス・ストリングス・バンド
佐久間順平
倉沢桃子
ハチャトゥリアン楽団
Dr.KyOn
玉城宏志
黒川修
小関純平
岡地曙裕
長見順
春麦光良
うつみようこ
Controversial Spark
GRANDFATHERS
オワリカラ
渋さ知らズオーケストラ
(with 梅津和時、白崎映美)
6/1(sun)~6/10(tue)
Kichijoji BAUS THEATER
BAUS 2/JAV
BAUS 3
防犯カメラ
監視中
Security Camera is Working
SOK

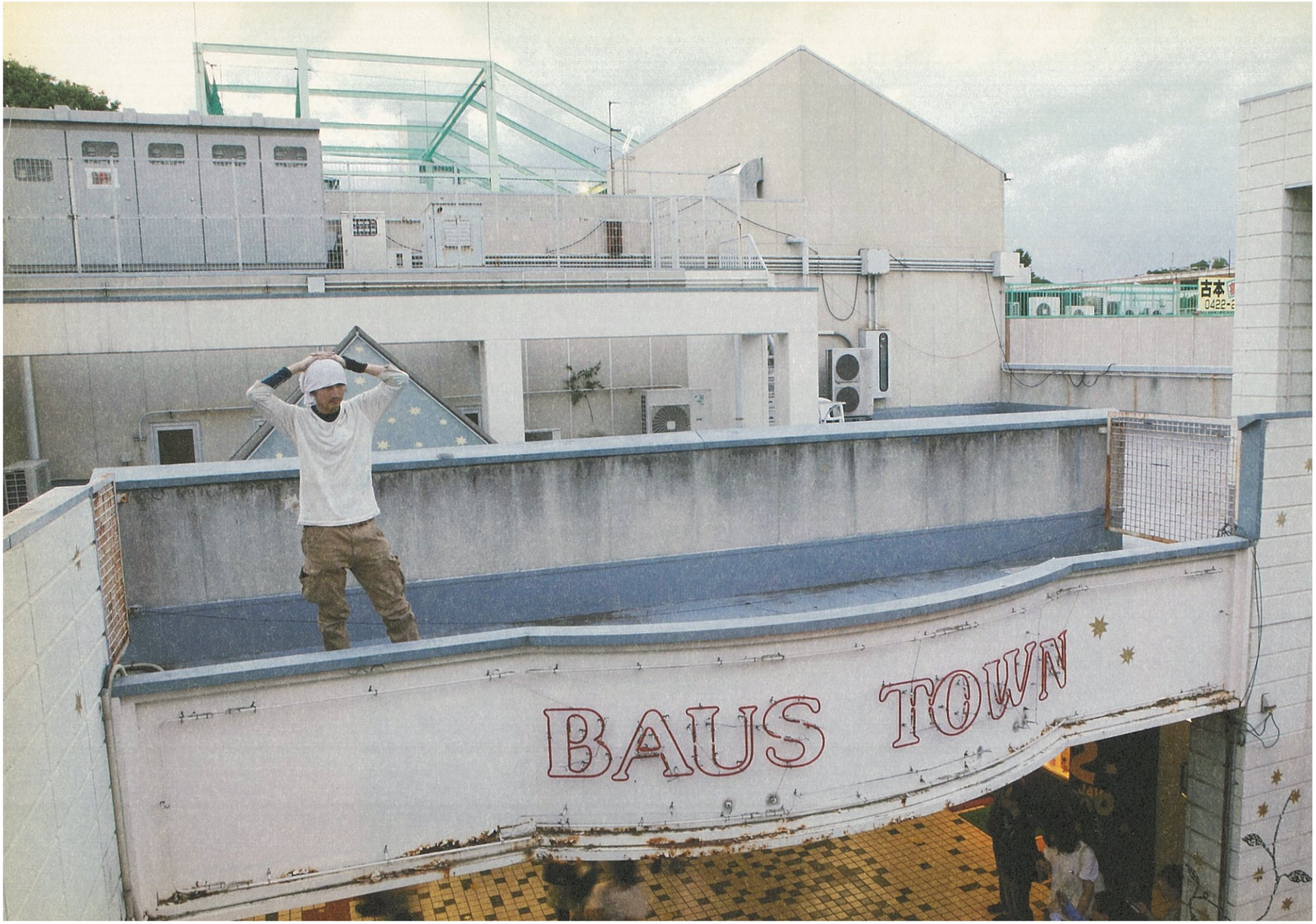
ゼイリブ
1989
AKIRA
1987
1989

TOILET



BAUS
シアタ

販売中
次回ロードショー
THE LAST BAUS


BAUS TOWN
古本

Yusuke ASAI × Tokyo Artpoint Project

植物になった白線

小金井

2011, 2012

制作中

白線とオリンピックとユートピア

高橋瑞木［水戸芸術館現代美術センター主任学芸員］

増殖、拡張してゆく淺井裕介の作品は、あたかも生命を宿している樹木のようだ。画面の中で動物のしっぽは植物の蔓と絡み合い、ひとの身体からは枝が生え、線と色がお互いを追いかけながらリゾーム状に空間を埋めてゆく。淺井が描く世界では、人間も動物も植物も明確な区別はなく交じり合う。その様子は種の間の競争や対立がないユートピアであり、複雑に連関する文様でアニミズム的世界観を描いたケルト人の想像力を連想させる。

淺井が同時代の他の画家と異なるのは、作品の巨大なスケールと絵を描く支持体や素材の多様さだ。彼が評価を得たのもギャラリーに展示されたキャンバスの作品より先に、屋外や広い空間に描いた作品だった。2006年に茨城県の取手市で開催された取手アートプロジェクトでは、長い間使われていなかった終末処理場の床や壁を覆っていたホコリを指でぬぐうことで絵を描いた。(図1) また、直接絵を描いてはいけない壁面には、簡単にはがすことができるマスキングテープを貼り、その上から絵を描いた。展覧会終了後、淺井は壁からはがされたマスキングテープを使い、新しい作品の素材として再生させた。
こうした初期の活動が象徴的に示すように、淺井は屋外空間に絵を描くものの、その永続性を要求することはせず、風化や撤去を受け入れる。この保存に対する執着のなさは、作品にとって現実世界があたかも仮住まいであることをほのめかしているようだ。あるいは、生成、消滅するサイクルそのものが淺井の作品とも言えるだろう。

彼の代表的な作品のシリーズに、訪れた場所の土を絵具として描く「泥絵」がある。「泥絵」とは、淺井が制作に訪れた場所で採取した土壌を絵具にして描く絵画作品で、2008年にインドネシアのジョグジャカルタで開催された展覧会で初めて披露された。(図2) 焦茶、黄、赤茶、黒――、自然の芳醇な色彩によって描かれた絵画は、改めて人類が豊かな自然環境の中で発生し、そこで「生かされている」ことを教える。他の作品同様、この「泥絵」も展覧会の会期終了後にはギャラリーの壁から拭きとられて消えるという宿命がある。終焉をすでに内包している絵画は、誕生した瞬間に死が運命づけられている生命体と同様の性質を宿しているとも考えられよう。
しかしながら、例外的に永続性が与えられている作品がある。それが道路の白線と同じ素材を使って描かれるシリーズだ。淺井は「与えられた場所には、そこにふさわしい形(フォーム)がある」と語っているが、その「ふさわしいフォーム」を実現するためには、ふさわしい素材が必要だ。アスファルトの道路上に絵を描くのにふさわしい素材は、探さずともすぐに見つかっただろう。なぜならすでにそこらじゅうの道路の表面は描かれた線や言葉だらけだからだ。
ギャラリーや美術館の白い壁のように、アスファルトの道路も反自然的な存在の筆頭だ。そもそもアスファルトは土ぼこりが舞う道を覆うために使われる。滑らかな灰色の無機質な表面をした道路からは、その下の土やそこに生息する虫や微生物を想像することは困難だ。舗装された道路の脇道から雑草が生えているのをふと見つけた瞬間になんだかホッとするのは、私たちがアスファルトによって自然を蹂躙しているという疚しさを、普段からそこはかとなく抱いているからかもしれない。

淺井は2011年に東京の代々木公園で白線を使った作品を制作した。代々木公園の敷地は第二次世界大戦中には陸軍の練兵場であり、敗戦後は在日米軍施設になった。そして1964年の東京オリンピックの際には選手村として使用され、その後に公園として開園したという経緯がある。
かつての東京オリンピックの時期の都市改造計画の代表的なものとして、河川の上に屋根をかけるように建設された首都高速道路が挙げられるだろう。ここで道路は地面どころか、河川をも覆っている。都市の中を複雑に交差しながら上下に走る首都高速道路は東京のユニークな都市景観のひとつに違いないが、そこには都市開発において、自然と共存するよりも覆い隠す、という方向性が見て取れる。

アスファルトに熱で焼き付けられた白線の植物や動物たちは、道行く人々に無言でその存在を伝える。それは、アスファルトやコンクリートで覆い隠されてしまった生命の白い影だ。再び東京オリン

ピック開催を2020年に控えた時期に、淺井によって再び都市空間に召喚された動植物たちの白い影は、前のオリンピックから半世紀が経つ間に、人々の都市への向き合い方の変化を物語るとともに、2011年に発生した東日本大震災と原発事故を経たわたしたちが都市空間に対して抱いている潜在的な理想——都市と自然と人間の共生のかたち——を浮かび上がらせている。そして、その理想を未来につたえるために、「与えられた場所」は、白線という半永久的な素材を淺井に選ばせたのだと思えてならない。

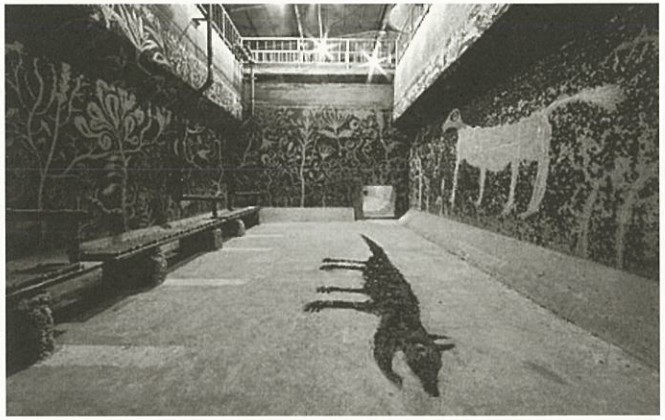


図1

図2

みつける

小川希［Art Center Ongoing代表／TERATOTERAチーフディレクター］

「来年の春ぐらいに本当に閉じることになりそうです」。仲良くしてもらっていたバウスシアター従業員の方からそう聞かされたのは2013年の暮れのこと。バウスシアターとは吉祥寺の駅前商店街の端で1984年に開業した老舗映画館で、ロードショーの他にも、独自の視点で選んだ単館系作品の上映や、音楽ライブ用の音響機材を使い通常ではありえない音量で上映を行う「爆音映画祭」など、長年にわたり映画と映画にまつわる様々なイベントを開催してきた伝説のスペース。その30年にわたる歴史にとうとう幕が閉じるというのだ。同じ吉祥寺で小さなアートスペースを運営している私にとって、バウスシアターは、魅力的な文化を発信し続けてきた大先輩であり、個人的にも中学生の頃から映画を観に通った思い出の場所でもあった。「本当の最後だからまた何かやれたらいいですね」従業員の方は、少し寂しげな表情でそうつぶやいた。というのも、私は自分のスペースとは別に、周辺地域を舞台としたアートプロジェクト「TERATOTERA」のチーフディレクターもやっていて、そこではこれまでにバウスシアターと組んで上映イベントや音楽ライブなどを何度かやらせてもらっていたのだ。バウスの最後に何ができるだろうか。閉館の知らせに大きなショックを受けながらも、それを思った時、自然と一人の作家が頭に浮かんだ。淺井裕介である。

淺井との出会いは10年ほど前に遡る。当時、私は若手作家を対象とした美術の公募展を企画していて、その応募作家の一人に彼がいた。この公募展では審査員を設けず、作家は他の応募作家に対して作品のプレゼンテーションを行い、その上で自分が面白いと思った作家に投票をし、その得票数順で展示作家が決まるというものだった。当時20代前半で、まだまだ無名だった淺井だが、このプレゼンテーションの場で緊張しながらも楽しそうにこれまで自分が手がけた大量の作品を見せてくれ、結果、他の作家から多くの票を集め展示の権利を獲得したのだった。その展覧会の搬入日の初日、淺井はマスキングテープと黒のマジックを手にして会場の壁に向かっていた。テープを貼っては描き、テープを貼っては描く。その動作は繰り返され、何もなかった白い壁に無数の植物が現れた。彼の代表作のひとつ「マスキングプラント」である。会期が始まっても「制作中」と背中に書かれた白いシャツを着て、淺井は休むことなく描き続け、最終日を迎える頃にはマスキングから生まれた植物は大きな樹へと成長していた。

その後の淺井はといえば、全国のアートプロジェクトやアートイベントにひっきりなしに招待され、加えて美術館の展覧会やギャラリーでの個展、またここ数年は海外にもその活動の幅を広げている。表現手法も「マスキングプラント」のみならず、発表場所の周辺で採集した泥と水で描く「泥絵」や、小麦粉を水でといて描く「粉絵」など、場所や状況に応じ様々に変化しながら一貫して絵を描き続けている。はじめて彼と出会った展覧会以降も、私のスペースでも何度か展示をしてくれているし、淺井の仕事はこれまでずっと注目して見続けてきた。だからだろうか、バウスシアターが閉館するという知らせを受けた時、彼となら何かができる気がしたのだった。

バウスシアター側に館の内外の壁面に絵を描く企画を提案するのと並行して、淺井本人にも連絡をとると、次に東京に出てくるタイミングで一度会おうということになり、バウスシアターで落ち合った。本人も幼少の頃からバウスシアターには何度か足を運んだことがあったようで、なにより歴史ある映画館の最後に絵を描けるということをとても光栄に感じてくれたようだった。「最後に華を添えられたらいいね」。けっして口数の多い方ではない淺井からそんな言葉が溢れた。

年が明けてバウスシアターから6月10日閉館という正式発表があった。最後の2ヶ月間は「THE LAST BAUS さよならバウスシアター、最後の宴」と題した閉館イベントが開催され、その一環として、5月9日–17日の9日間、バウスシアターの協力のもと、淺井は老舗映画館の外壁および館内に一般公開で絵を描くこととなった。「華を添える」という言葉から、私はてっきりカラフルな壁画を予想していたのだが、彼が選択したのは意外にも白いテープと黒いマジックを使用するあの「マスキングプラント」だった。公開制作初日から、壁面にはマスキングテープが次々と貼られマジックで植物が描かれていく。貼っては描き、貼っては描く。10年前、彼に出会った頃と何も変わらず、その動きには一切の迷いがない。後ろから見ていると、一連の動作が驚くほどのスピードで行われているのがよくわかる。まるで何かに導かれているかのように、淺井の腕は動き続ける。

全国の様々な場所に呼ばれ絵を描くようになってからも、淺井はぶらりと私の小さなスペースにやってきて、最近制作した作品の話をしてくれたりする。記録写真を見せてくれながら、「ここでこん

な生き物が出てきた」とか、「こんな成長が生まれた」とか、そんな口調でいつも嬉しそうに話をしてくれる。まるで他の人が描いた作品について語っているかのようなその様子を私はいつも不思議に思っていたのだが、現場で淺井の描く姿を間近で見ていると、その理由がよくわかる気がした。描き出される作品たちは、淺井の頭の中ではなく、その場に元から眠っていて、それらがひとつひとつ呼び覚まされたかのように立ち現れてくるのである。淺井は場所に寄り添い、空気や時間の流れを感じ、見えない言葉を交わし続けながら、そこでしか描くことのできない絵を導きだすのである。今考えると、バウスシアターの最後と聞いた時に、彼のことが真っ先に思い浮かんだのはきっとそういうことだったのだろうとなあと思う。バウスシアターに染み付いた時の流れを、彼なら優しく炙り出してくれるはずだと。

公開制作は滞りなく進み、日を追うごとにバウスシアターの壁はマスキングプラントで覆われていった。ただ10年前と少し違ったのは、彼の制作を補助する多くのボランティアがいることだった。近年、淺井の制作の現場には多くのボランティアスタッフが加わり、彼の指示のもと一心不乱に手を動かしている。沢山の人がマジックを手に持って一堂にマスキングテープに向かうその様子は、淺井の手が同時に何本も増えたかのようで、大きな生き物のようにさえ感じられる。
淺井を中心として、無数の手が何かに導かれるかのように黒い色を塗り続けていく。描かれた植物に誘われるかのように、時折、淺井の手からは鳥やネズミや猫といった小動物や、時にはもっと大きな動物なんかも飛び出してくる。加えて、少し前の現場から登場したという一輪の花のような金色の花と小人の絵がマスキングプラントと共演するかのようにつぎつぎ貼られていく。お別れのためか、淺井は小人の口元に「Bye Bye」と書かれた吹き出しをはっていた。そして、今回私がひとつだけ気になったのが、型取りを使い金色のスプレーで描かれた星の絵だ。これまで彼の作品には見たことのなかったこの金色の星がたくさん描かれていたのである。「これは?」と本人に尋ねると「うん。よくわからないんだけど、なんか出てきちゃったんだよね」とまたいつものように嬉しそうに微笑みながら教えてくれた。出てきたならば仕方がない。何かきっとわけがあるのだろうから。

公開制作も終盤を迎えると、映画を観に来たお客さんが自由にメッセージを書くことができるようマスキングテープで作られた吹き出しがたくさん用意された。「Bye Bye」と書かれたものをはじめに用意していたように、おそらく淺井は別れのメッセージを予想していたのかもしれない。ただ、ふたを開けるとバウスシアターへ向けた感謝と思い出の言葉がその大半を占めていた。お客さんの想いの詰まった吹き出しは館内外の壁に散らばった小人の口元に添えられ、そのひとつひとつを見て回ると、長い時間このスペースが多くの人々に愛され、たくさんの思い出や記憶を生んできたことがひしひしと感じられた。「華を添える」という言葉の意味がそこでようやく理解できた気がした。
制作最終日になるとバウスシアターの館内と外の壁はマスキングプラントとたくさんのメッセージで埋め尽くされていた。私はそれらを時間をかけて眺めながら、同時に散りばめられている金色の星のことが気になってならなかった。なんでこの星はここに「出てきた」のだろうと。そんなことをぼんやり考えながら、バウスシアターでは最後となる爆音上映でのマーティン・スコセッシ監督の「ラストワルツ」のチケットを買って観ることに。映画が終わってもしばらく感動で席から立ち上がれなかったのだけれど、暗い会場がふっと明るくなって、その時に私は漸くわかった。淺井が今回バウスシアターの壁に浮かび上がらせたあの無数の星は、映画の光だったのだと。私たちが夜の空に見る星の光は、実際はずっとずっと昔に放たれたものであるという。フィルムに定着しているのも過去に撮影された映画の光であり、それが今一度スクリーンに映し出され、人々を照らし出すのだ。映画が終わればその光は消えてしまうけれど、私たちの記憶の中でずっと輝き続ける。淺井の手を借り、バウスシアターの金色の星は、だからきっと、ここに「出てきて」しまったのだ。

「世界中の何でもないところに、大事なものは何でもなく隠れている」これは一連のバウスシアターの壁に描いた作品に対して淺井がつけたタイトルである。草や木や花、動物や小人の言葉、そしてあの金色の無数の星のように、これからも淺井は、世界中の何でもないところで、何でもなく隠れている大事なものたちを、絵を通して私たちに見せ続けてくれるのだろう。何かをみつけた時のあの嬉しそうな笑顔とともに。

浅井裕介×東京アートポイント計画

監修:
森 司[東京文化発信プロジェクト室]
編集:
坂本有理[東京文化発信プロジェクト室]

撮影:
蓮沼昌宏、撮影手配/鈴木事務所(pp.10-49)
細川葉子(pp.52-66)
山本渉(p.68、p.71右上)
浦中ひとみ(p.69、p.70左下)

発行日:
平成27年3月31日
発行:
公益財団法人東京都歴史文化財団 東京文化発信プロジェクト室
〒130-0026 東京都墨田区両国3-19-5 シュタム両国5階
Tel: 03-5638-8800 Fax: 03-5638-8811
Email: info-ap@bh-project.jp
URL: www.bh-project.jp

デザイン:
Kazuya Kondo Inc.
製作:
求龍堂
印刷・製本:
オノウエ印刷

© Tokyo Culture Creation Project
無断転載・複写を禁じます

浅井裕介［あさいゆうすけ］

1981年東京都生まれ。絵描き。テープ、ペン、土、埃、葉っぱ、道路用白線素材など身の回りの素材を用いて、キャンバスに限らず角砂糖の包み紙や紙ナプキンへのドローイング、泥や白線を使った巨大な壁画や地上絵のシリーズまで、あらゆる場所と共に奔放に絵画を制作する作家。

Tokyo Art Reserch Lab tarl TOKYO ART RESEARCH LAB

アートプロジェクトを実践する全ての人々に開かれ、共につくりあげるリサーチプログラムです。現場の課題に対応したスキルの提供や開発、人材の育成を行うことから、社会におけるアートプロジェクトの可能性を広げることを目指しています。

www.tarl.jp

東京アートポイント計画

地域・市民が参画するアートプロジェクトを通じて東京の多様な魅力を創造・発信することを目指し、「東京文化発信プロジェクト」の一環として東京都と公益財団法人東京都歴史文化財団が展開している事業です。

www.bh-project.jp

＊「東京文化発信プロジェクト室」は、平成27年4月1日より「アーツカウンシル東京」と組織統合する予定です。

TOKYO CULTURE
CREATION PROJECT